京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二三－六

北野廃寺・北野遺跡

北 野 廃 寺 ・ 北 野 遺 跡

2024年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

北 野 廃 寺 ・ 北 野 遺 跡

2024年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

1　谷110出土　三彩陶器壷

2　埋納遺構70出土　土師器皿（地鎮具）

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、開発事業に伴う北野廃寺・北野遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

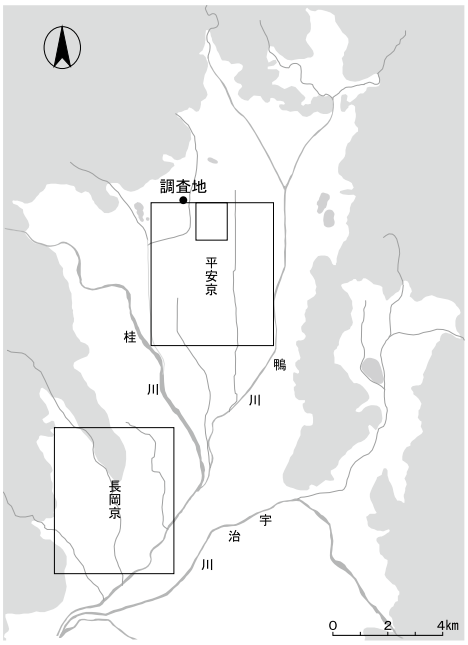
令和６年３月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	北野廃寺・北野遺跡　（京都市番号　23 S 012）
2	調査所在地	京都市北区北野下白梅町30
3	委　託　者	日本ホールディングス株式会社　代表取締役　八尾浩之
4	調 査 期 間	2023年５月29日～2023年7月31日
5	調 査 面 積	297㎡
6	調査担当者	三好孝一
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「衣笠山」・「花園」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	三好孝一
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
15	協　力　者	調査に際して下記の方がたからご指導・ご教示をいただいた。記して感謝を申し上げます。（順不同、敬称略） 北野信彦・山田卓司（龍谷大学）、丸山真史（東海大学）、平尾政幸



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過　…… 1
２．遺跡の位置と環境　…… 4
（１）位置と環境　…… 4
（２）周辺の調査　…… 6
３．遺　　構　…… 15
（１）基本層序　…… 15
（２）遺構の概要　…… 16
（３）第１面の遺構　…… 17
（４）第２面の遺構　…… 19
４．遺　　物　…… 26
（１）遺物の概要　…… 26
（２）土器類　…… 27
（３）瓦　類　…… 32
（４）土製品　…… 35
（５）石製品　…… 36
（６）金属製品　…… 36
（７）動物遺存体　…… 36
（８）赤色顔料　…… 37
５．ま と め　…… 39

図　版　目　次

巻頭図版１　遺物　１　谷110出土　三彩陶器壷
２　埋納遺構70出土　土師器皿（地鎮具）
図版１　遺構　第１面平面図（１：150）
図版２　遺構　第２面平面図（１：150）
図版３　遺構　調査区東壁断面図（１：50）
図版４　遺構　調査区南壁断面図（１：50）
図版５　遺構　埋納遺構70・土坑101実測図（１：10）、土坑12実測図・溝５断面図（１：40）
図版６　遺構　柵１実測図（１：60）、谷110断面図（１：40）

図版７　遺構　柱穴58、土坑15・16・38・54・60・100実測図、土坑17・55断面図（１：40）

図版８　遺構　溝19・20・45・50・80断面図（１：40）

図版９　遺構　建物１実測図（１：60）

図版10　遺構　建物２実測図（１：60）

図版11　遺構　柵２・３実測図（１：60）

図版12　遺構　１　調査区南半　第１面全景（北から）

２　調査区北半　第１面全景（北から）

図版13　遺構　１　埋納遺構70 土器検出状況（南から）

２　埋納遺構70 土器検出状況　拡大（南から）

３　埋納遺構70 土器埋納状況（南から）

４　埋納遺構70 上蓋除去状況　拡大（南から）

５　埋納遺構70 石英粒除去後（南から）

図版14　遺構　１　溝５（東から）

２　溝５断面（東から）

３　土坑12断面（北から）

４　土坑101 イヌ検出状況（南東から）

図版15　遺構　１　調査区南半　第２面全景（北から）

２　調査区北半　第２面全景（北から）

図版16　遺構　１　建物１・２（北から）

２　建物１ 柱穴90断面（南から）

３　建物１ 柱穴104断面（北から）

４　建物２ 柱穴91断面（東から）

５　建物２ 柱穴131断面（東から）

図版17　遺構　１　柵１（南西から）

２　柵１ 柱穴29断面（西から）

３　柵１ 柱穴32断面（西から）

４　土坑60〔左〕・土坑54〔右〕完掘状況（北から）

５　土坑60断面（南から）

６　土坑54断面（南から）

図版18　遺構　１　谷110断面（西から）

２　谷110北東拡張区断面（東から）

図版19　遺物　土器・土製品・石製品・金属製品

図版20　遺物　軒瓦

図版21　遺物　道具瓦・平瓦

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：5,000）　…… 1
図２　調査区配置図（１：500）　…… 2
図３　調査前全景（北から）　…… 3
図４　作業風景（北から）　…… 3
図５　土坑101イヌ検出状況（東から）　…… 3
図６　土坑101イヌ取り上げ状況（北から）　…… 3
図７　北東拡張部掘削状況（北から）　…… 3
図８　調査後全景（北から）　…… 3
図９　周辺調査位置図（１：3,000）　…… 7
図10　整地層分布図（１：300）　…… 15
図11　埋納遺構70出土土器実測図（１：３）　…… 27
図12　整地層３、土坑54、柱穴58・123・132、溝80出土土器実測図（１：４）　…… 28
図13　谷110出土土器実測図（１：４）　…… 30
図14　軒瓦拓影及び実測図（１：４）　…… 32
図15　道具瓦拓影及び実測図（１：４）　…… 33
図16　平瓦拓影及び実測図（１・４）　…… 34
図17　試料像　…… 37
図18　拡大画像１　…… 37
図19　拡大画像２　…… 37
図20　分析結果スペクトル　…… 37
図21　飛鳥時代から平安時代の遺構分布図（１：2,000）　…… 40

表　目　次

表１　周辺調査一覧表　…… 8
表２　遺構概要表　…… 16
表３　遺物概要表　…… 26
表４　測定条件　…… 37
表５　分析結果　…… 37

付　表　目　次

付表１　土器類観察表 …… 41
付表２　瓦類観察表 …… 43
付表３　土製品・石製品・金属製品観察表 …… 44

北野廃寺・北野遺跡

１．調査経過

今回の調査は、京都市北区北野下白梅町30で計画された開発事業に伴うものである。

付近は、北山背最古の寺院とされる北野廃寺推定寺域の南部ならびに縄文時代から室町時代にかけての北野遺跡の南縁、平安京北縁の複合的な場所に位置する。

この地において新たに建物の建設が計画され、これを受けた京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）は、試掘調査を行い、その成果に基づき発掘調査が必要と判断された。

発掘調査は、事業者より委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施し、京都市文化財保護課から指導を受けた東西11.3ｍ、南北24.8ｍの約280㎡の範囲の調査を計画した。

調査は、令和５年５月29日から開始し、掘削土置場の都合上、調査区を南北に二分した。現地の作業は、アスファルト被覆が除去された段階から重機掘削を開始、盛土や近代までの堆積層を除去、その後人力による遺物包含層および遺構の掘削を行った。遺構面は２面を確認した。調査区中央部の室町時代後期の整地層上面と基盤層上面を第１面とし、主に近世の遺構を検出した。基盤層

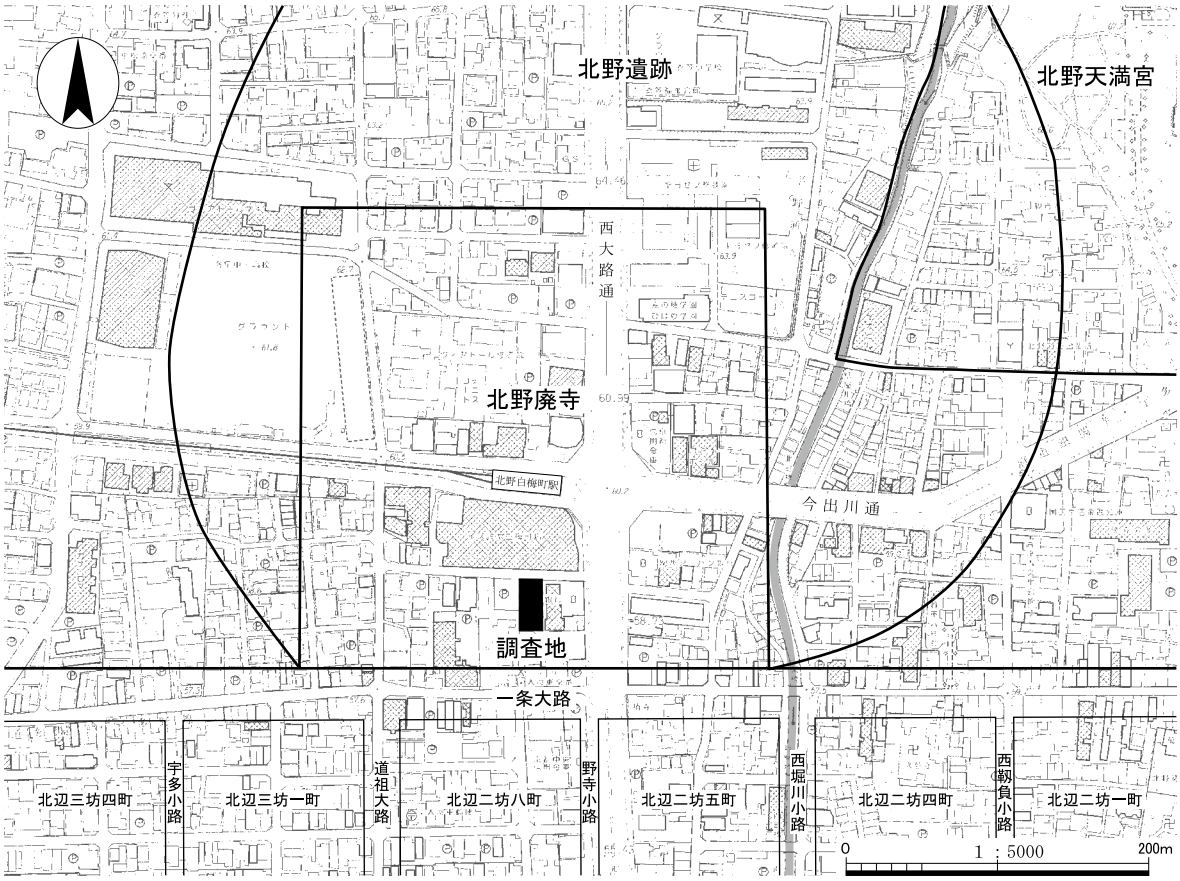


図１　調査位置図（１：5,000）

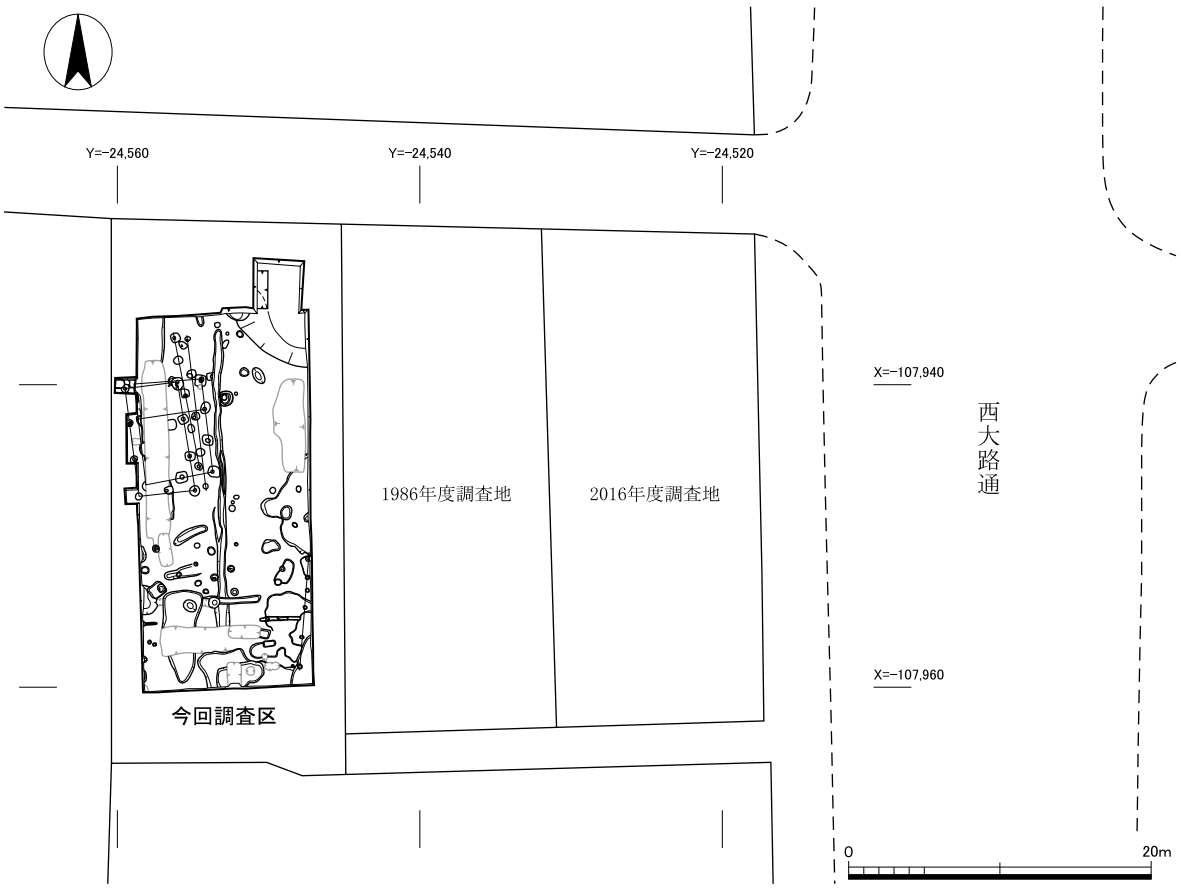


図２　調査区配置図（１：500）

上面を第２面として主に平安時代の遺構群を検出した。各々の遺構面で、写真撮影とオルソ写真測量による平面測量を行った。

調査の結果、北野廃寺跡南西部では、これまで未確認であった平安時代の掘立柱物群が展開することが新たに判明した。調査区北東部では、周辺の調査結果でも確認されている、大量の遺物を包含する谷地形の延長部を確認した。これらの遺構の重要性に鑑み、京都市文化財保護課・事業計画者との協議を行い、調査区の一部を拡張した。作業は埋め戻しを含めて７月31日に完了した。

なお、調査の各段階には京都市文化財保護課の検査を受け、７月14日には、検証委員である網伸也氏（近畿大学教授）の指導を受けた。

図３　調査前全景（北から）

図４　作業風景（北から）

図５　土坑101イヌ検出状況（東から）

図６　土坑101イヌ取り上げ状況（北から）

図７　北東拡張部掘削状況（北から）

図８　調査後全景（北から）

２．遺跡の位置と環境

（１）位置と環境

遺跡は、京都盆地北西部の標高60ｍ前後に立地する。周辺は、衣笠山や大文字山などの裾部に形成された扇状地から緩傾斜面が広がり、東側には紙屋川（天神川）が流下する。

現状は、遺跡内のほぼ中央に西大路通が南北に、今出川通が東西に敷設され、中央から南に向かった位置には京福電気鉄道株式会社北野線の北野白梅町駅が設けられている。

調査地周辺での縄文時代以前の遺構や遺物の検出例は非常に少ない。その中でも最も古く位置づけられるものに、市電軌道敷撤去の際に確認された縄文時代草創期の有茎尖頭器や、1977年の調査（調査６）で出土した当該時期の石鏃、調査８で出土した尖頭器などがあげられる。弥生時代の遺構としては1978・79～80年の調査で検出された弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴建物群がある。

律令制前では葛野県、その後山城国葛野郡の一部とされ、調査地から西に広がる嵯峨野地域は、『日本書紀』などの史料に基づいて、当該地域に基盤を置いた渡来氏族である秦氏の本貫地の一つに比定されている。これを裏付けるように、嵯峨野の地は古墳時代後期から飛鳥時代にかけての古墳や集落が急増する。低位段丘上には、後期の前方後円墳としては比較的大型の天塚や段ノ山、垂箕山などが築造される。これらは他地域と比較してより遅い段階まで継続的に築造されることでこの地域を特徴づける。また巨大な横穴式石室を主体部とする蛇塚古墳や双ヶ岡一号墳は、広隆寺の創建年代に近い６世紀後半から７世紀初頭の築造とされる。広隆寺旧境内周辺の集落跡遺跡はこの時期に拡大しており、陸続と検出される竪穴建物群にこの地域の特性が見いだせる。

上記の様相は、土木技術に長け、養蚕や機織りなどにすぐれた技術を発揮し、太秦蜂岡町に所在する広隆寺の造営に携わったとされる秦氏に結び付けられることが多い。

広隆寺と北野廃寺の創建に関しては、早くから議論が行われている。一般に広隆寺の創建に関しては、『日本書紀』推古天皇11年（603）巳亥朔日条に、秦河勝が聖徳太子より授けられた仏像を祀るために建立した「蜂岡寺」がそれに充てられると考えられている。一方、承和３年（836）に完成した『廣隆寺縁起』には、広隆寺は当初から今の太秦の地に建立されたのではなく、現在の北区に所在する平野神社付近から移されたと記載されており、山城最古の瓦が出土する北野廃寺がもともとの広隆寺とみる説もある。しかし、北野廃寺と広隆寺から出土する飛鳥から奈良時代の瓦には共通性を見出しにくく、北野廃寺から広隆寺移転説は考古資料からは成り立ちにくい。一方で、『日本書紀』推古31年７月条に新羅から献上された仏像を「葛野泰寺」に安置したという記事がある。近年の学説では、この「葛野泰寺」と「蜂岡寺」の二つの寺院が存在していたものが、平安京遷都を契機として一つに合併し広隆寺として現在に法灯を伝え、葛野泰寺（北野廃寺）は、官寺の常住寺（野寺）として整備され、国家的法要を営むようになるとされている。北野廃寺からは、平安時代の土器ではあるが「鵤室」・「秦立」と墨書された土器が出土しており、もともと秦氏が造

営に関わったことをうかがい知れる。

平安遷都に伴い調査地の南側は右京北西域として京内に組み入れられる。調査地東部を流下する紙屋川（天神川）も、西堀川として京内を南北に貫く流路として付け替えられる。

『日本後記』延暦15年（796）11月14日条には、野寺に南都七大寺とともに新銭となった隆平永寶が施されたとの記事がみられ、この寺院が官寺に並ぶ扱いを受けていたことがうかがい知れる。この野寺は本名を常住寺といい、平安時代、南都七大寺や東・西寺とともに国家的な法要が営われたことが史料から知ることができる。この野寺については、北野廃寺推定寺域北東部から「野寺」と記された土師器が複数点出土したことにより、この地において野寺が実在していたことを考古学的に立証した。

その後、『日本文徳天皇実録』によると、天安２年（858）1月27日に西南別院が焼失、さらに『日本三代実録』には、元慶８年（884）３月15日には塔への落雷により五層目より出火、金堂・講堂・鐘楼・経蔵・歩廊・中門などが灰燼に帰したと記される。

その後、常住寺は再建が繰り返されたようで、鎌倉時代中期の『拾芥抄』下巻への寺名記載をはじめ、室町時代前半期の『師茂記』の応安７年（1374）２月条にその名が確認できるため、この頃までは形を変えながらも法燈を受け継いでいたことがうかがえる。

これまでの発掘調査で得られた寺院と直接的に関連する遺構の検出例として以下のものを挙げることができる。北野白梅町交差点北西側で検出された推定講堂跡とされる瓦積基壇と回廊、そこから北に約110ｍ離れた位置で検出された寺域北限を画するとされた東西方向の溝、そのほぼ中間に位置する竈を伴うものや、大型の掘形を持つ柱穴の存在から、雑舎群と推定された掘立柱建物群、東限を画する可能性のある飛鳥時代から奈良時代と平安時代の２時期にわたる南北方向の溝、今回の調査区東隣の調査で検出された石列を伴う基壇状の土盛などがある。遺物的には、大量の瓦類と平安時代前期と思われる塑像の仏頭が確認されている。

また、今回の調査区を含む推定寺域南西部で検出された瓦窯群と白炭窯、掘立柱建物群は、各地で検出されている寺院造営にかかわる工人集団作業域との関係性を探るうえで貴重な事例であり、特に『日本紀略』弘仁11年（820）閏１月24日条に記される、常住寺において四天王銅像を鋳造し、近江の梵釈寺へ遷すとの記事はその具体的様相をうかがわせる史料として注目される。

平安時代中期以降から室町時代における調査地周辺の状況を伝える史料は、現在のところ上記の野寺（常住寺）に関する文献史料が主である。近隣の発掘調査では、平安時代中期から鎌倉時代の遺構の検出や遺物の出土は希薄であるが、室町時代になると一定確認することができ、建物や溝などが多数検出されており、周辺一帯が集落域として機能した状況がうかがえる。特に推定寺域北部で確認された、門と考えられえる遺構や、溝をめぐらせる規模の大きな屋敷地は、北野社との関連が指摘されている。

（2）周辺の調査（図９、表１）

北野廃寺の発見の端緒となったのは、昭和11年（1936）に付近一帯で行われた整地ならびに市電敷設工事である。現在の西大路通と今出川通が交わる地点で掘削が行われたところ、大量の古瓦を包含する堆積層が観察され、これを契機として調査１で発掘調査が行われた。この調査報告では、そこから西方の畑地にも数十メートルの範囲にわたって古瓦の散布が認められたとされる。

以降、嚆矢となった昭和11年の調査から現在に至るまで様々な研究機関や、調査団体によって発掘調査が行われ、その数は、主要なものだけでも40箇所以上となり、この他、数多くの試掘・立会調査が行われてきた。その間、87年間に及ぶ調査成果の蓄積によって、前項でも述べた講堂跡と推定される瓦積基壇や回廊、北を画するとされる溝や築地状遺構、寺域東部を区画するとみなされた２時期の南北方向の溝のほか、瓦窯などが確認されてきたが、いまだ主要な伽藍の配置や、明確な四至の確定には至ってはいない。以下、代表的な調査区について成果の一部を記す。

調査２・６・23・29では、６を中心として講堂跡と想定される礎石抜取穴を伴う奈良時代の瓦積基壇と回廊が検出され、付近に伽藍中枢部が存在していたと想定されている。なお、この建物に関しては金堂跡とする見解も見られる。これとともに、２時期の焼土面も検出され、それぞれ元慶８年（884）、天慶３年（940）の火災痕跡に相当すると考えられている。調査６では、このほか、奈良時代の掘立柱建物や平安時代の土取り穴、室町時代の掘立柱建物なども検出されている。

調査５では、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴建物、奈良・平安時代の築地状遺構や掘立柱建物と溝、平安時代の土取り穴、室町時代の掘立柱建物や柵が検出された。これらのうち、築地状遺構と溝は、北野廃寺の当該時期の寺域東限と推定されている。また、「鵜室」と墨書された灰釉陶器の段皿が出土したことから、北野廃寺の実態を知る上で貴重な資料となった。

調査８では、江戸時代の溝から縄文時代の尖頭器が出土した。

調査10では、飛鳥時代から奈良時代にかけての南北方向の溝、平安時代の掘立柱建物をはじめ、溝や土坑、中世の掘立柱建物などが検出された。南北方向の溝は、南方約90ｍに設けられた調査５で検出された同方向の溝に連続するとされ、この二つの調査地の間の調査13・15でも、これらに連続する可能性が高い溝を検出したことにより、これらを一連のものとし、寺域東限の区画溝とする見解が示された。また、調査区南側で検出した平安時代の不定形土坑群などから「野寺」と墨書された土師器が複数点出土し、これら以外にも「寺」・「切経」などと記された土器が確認されるなど、常住寺（野寺）の実存に迫る資料が得られた。

調査11は、今回の調査地北側に隣接し、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴建物のほか、飛鳥・奈良時代の竪穴建物、北西から南東に開析する谷状地形に構築された飛鳥時代から平安時代前期にかけて断続的に操業していた北野廃寺所用瓦の窯跡、金属加工などに用いる木炭を製造した白炭窯、平安時代の掘立柱建物、中世以降の掘立柱建物や溝を検出した。

白炭窯の検出や、今回出土遺物の中に鉄滓や銅滴という鋳造関連遺物が含まれていることは、前掲の『日本紀略』に記される四天王銅像の鋳造記事などともあいまって、寺域周辺に設けられた工

房群の具体的考古資料として特筆される。

調査15では、飛鳥時代の南北方向の溝、平安時代の掘立柱建物や径2.5ｍ以上の不定形土坑を複数基検出している。また「野」と墨書された土師器が出土した。

調査16では、「佛所」・「秦立」と記された墨書土器が出土し、寺院関連施設の所在とともに、建立に関し秦氏が関与していたことが裏付けられた。

調査17では、飛鳥時代の竪穴建物と、寺域の北を画すると考えられる東西方向の溝が検出された。この溝の延長と想定される溝は、東側で行われた調査25でも確認されている。

今回の調査地東側に隣接する調査18では、調査11から連なる谷状地形、平安時代の整地層とその上面に堆積する焼土層や石組みを伴う土壇、室町時代の柱列や溝、土坑を検出している。遺構の

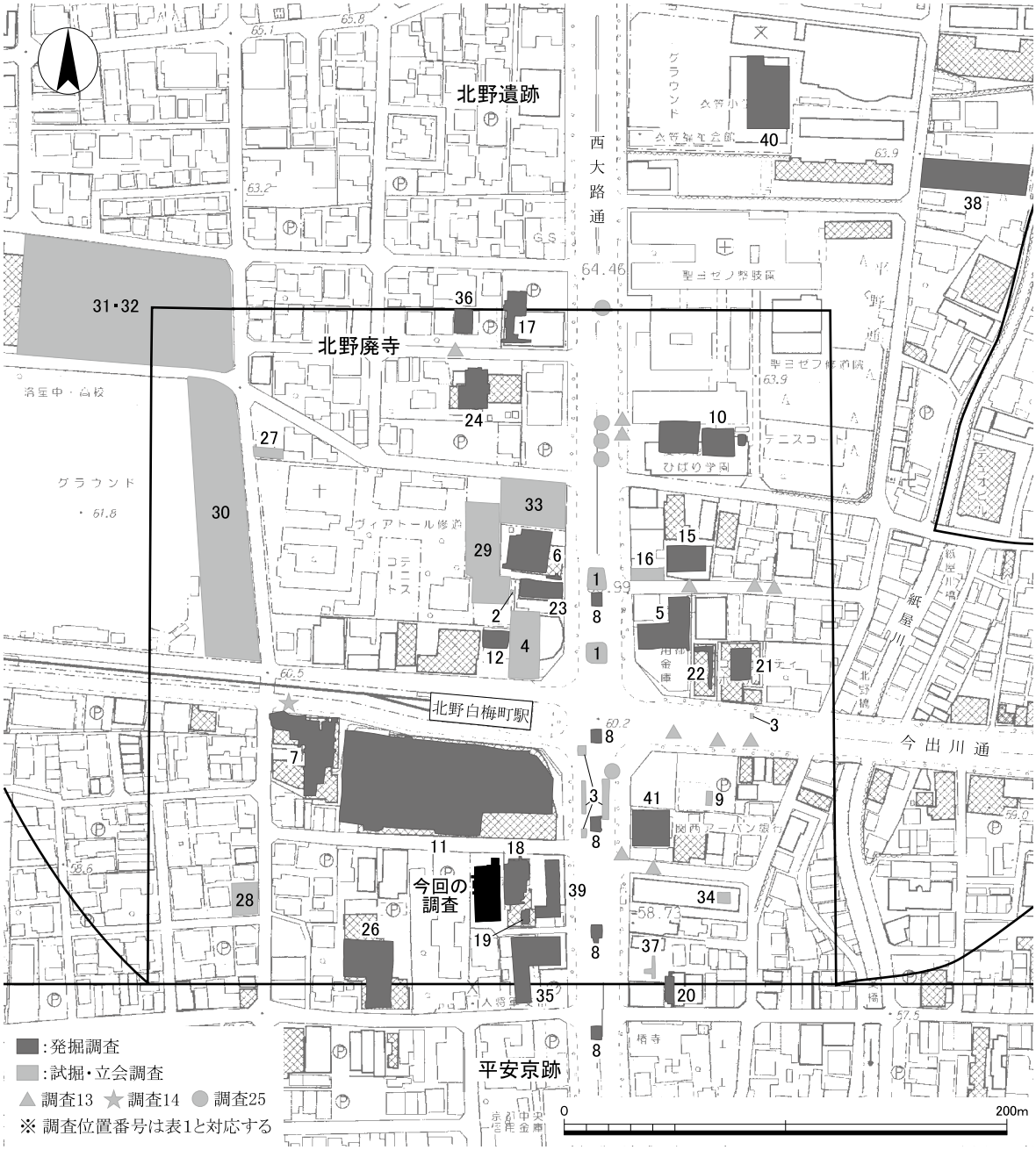


図９　周辺調査位置図（１：3,000）

表１　周辺調査一覧表

調査位置	調査方法	調査期間	調査機関	調査面積（㎡）	主な遺構	主な遺物	文献番号
1	試掘	1936/07/27～1936/09	京都府史蹟調査会	約90？	遺物包含層、基壇または築地状遺構。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、陶磁器類。室町の香炉。	1・2
2	立会	1965/07/01	京都府教育委員会　文化財保護課	－	飛鳥～奈良の瓦積基壇。	—	3
3	発掘・立会	1975/06/02～1975/06/30	六勝寺研究会	－	飛鳥～平安の溝状遺構、基壇状遺構、ピット。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉。	3
4	発掘・立会	1975/07/29～1975/08/27	六勝寺研究会	－	平安前～後期の石列溝、ピット。	平安前～後期の瓦、土師器、須恵器、緑釉。	4
5	発掘	1977/03/07～1977/06/04	京都市埋文研	約400	古墳の竪穴建物。平安以前の溝、建物。平安の溝。鎌倉の遺物包含層。室町の溝、建物、柵。	飛鳥～平安の軒丸瓦、軒平瓦、緑釉、灰釉「鵜室」、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、釘。鎌倉の土師器。	5・6
6	発掘	1977/12/19～1978/02/20	京都市埋文研	約360	奈良～平安の基壇建物（焼けた痕跡）。室町の建物、土坑。	石器。飛鳥～平安の瓦、土器。室町の土器。	7
7	発掘	1978/09/01～1978/10/28	京都市埋文研	約500	弥生の竪穴建物。飛鳥の竪穴建物。平安の建物、溝。中世の溝。	平安中期の土師器「鵜室」、須恵器、緑釉、灰釉、金銅金具。	8
8	発掘・立会	1978/10/25～1978/11/30	京都市埋文研	－	中世の溝、土坑。江戸の河川。	飛鳥～奈良の瓦。	9
9	試掘	1979/05/26～1979/05/31	京都市埋文研	20	平安のピット、土取り穴、南北溝。	瓦、土師器、須恵器、瓦器、緑釉。	10
10	発掘	1979/06/06～1979/07/31	京都市埋文研	約500	飛鳥の溝、土取り穴。平安の溝（寺域東限）、土坑、建物。中世の建物、溝、土坑、柵。	瓦、土師器「野寺」、須恵器。	11・12
11	発掘	1979/10/23～1980/04/16	京都市埋文研	約3600	弥生の竪穴建物。飛鳥～平安の窯。平安の掘立柱建物、溝、土坑。室町の建物、柵、井戸。	弥生土器。奈良～平安の瓦、土師器、須恵器、塑像仏頭。	13
12	発掘	1980/04/23～1980/05/05	京都市埋文研	約80	平安～室町のピット、土坑。	平安～室町の瓦、土師器、染付。	14
13	広域立会	1981/06/08～1982/03/19	京都市埋文研	－	古墳の溝？、竪穴建物。飛鳥～平安の溝、土坑。室町の溝、土坑、柱穴、井戸。江戸の土坑、井戸。	古墳～江戸の瓦、土師器、須恵器、墨書土器「野寺」、緑釉、瓦器、キリシタン墓碑。	15
14	広域立会	1981/10/10～1982/08/20	京都市埋文研	－	平安の溝（一条大路北側溝、馬代小路東、西側溝、道祖大路西側溝含む）、井戸、土坑。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉。	16
15	発掘	1983/01/25～1983/03/08	京都市埋文研	158	7世紀の南北溝。平安の建物。	7世紀の瓦、土師器、須恵器。平安の土師器、須恵器、緑釉、硯、釘、鉄滓。	17・18
16	試掘・立会	1985/12/19～1985/12/20	京都市埋文研	－	平安の土坑状遺構。	平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉「秦立」「佛所」、黒色土器、青磁、白磁、製塩土器、塼、金属製品。	19
17	発掘	1986/05/08～1986/05/31	京都市埋文研	173	飛鳥の竪穴建物。奈良の溝。平安の建物、土坑。鎌倉～江戸のピット。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、墨書土器「野」。鎌倉～江戸の土師器。	20・21
18	発掘	1986/06/02～1986/06/30	京都市埋文研	206	飛鳥～奈良の自然流路、土坑。平安の土壇、瓦溜、整地層。鋳造関連施設。室町の柱穴、溝、土坑。	飛鳥～奈良の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉。室町の土師器。二彩。	22・23
19	試掘	1987/03/10～1987/03/11	京都市埋文研	－	奈良～平安の土壇状遺構、流路。	平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉。	24
20	発掘	1987/04/21～1987/05/09	京都市埋文研	55.4	古墳の流路。平安の溝、土坑、柱穴、整地、敷石状遺構。鎌倉の溝、柱列。土坑、室町の柱列。	古墳の土師器。平安の瓦、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉、灰釉、白磁、土馬。鎌倉～室町の土師器。	25・26
21	発掘	1987/04/27～1987/06/06	京都市埋文研	137	平安の土壇、溝、土坑。室町の柱穴。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉、二彩。	27
22	発掘	1988/07/21～1988/08/05	京都市埋文研	56.3	平安の溝、土坑、柱穴、流路。	平安の瓦、土師器、須恵器、黒色土器、二彩、鉄塊。	28

調査位置	調査方法	調査期間	調査機関	調査面積(㎡)	主な遺構	主な遺物	文献番号
23	発掘	1990/02/14 ～1990/03/03	京都市埋文研	約90	奈良～平安の土坑、基壇版築。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器。	29・30
24	発掘	1996/10/16 ～1996/11/23	京都市埋文研	220	奈良の竪穴建物、掘立柱建物、溝。平安の掘立柱建物、カマド、土坑。室町の建物、土坑。	奈良～平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉、製塩土器。室町の磁器。	31・32
25	試掘・立会	1993/06/24 ～1994/02/02	京都市埋文研	833.1	飛鳥～平安の回廊の版築、溝、瓦溜。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、墨書土器。	33
26	発掘	1997/03/07 ～1997/05/23	京都市埋文研	563	平安の一条大路北側溝、井戸、土坑、整地層。室町の土坑。江戸の整地層、溝。	弥生土器。奈良～平安の瓦、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉、灰釉多口瓶。室町～江戸の陶磁器類。	34
27	立会	1997/04/11 ～1997/04/21	京都市埋文研	－	平安の基壇状高まり、土坑。中世の整地層。	－	35
28	立会	1997/05/09 ～1997/05/16	京都市埋文研	60	平安の溝、土坑、路面、ピット。中世の溝。	平安～中世の瓦類、土器類。	36
29	試掘	1999/08/05	京都市文化財保護課	－	奈良～平安の基壇建物、掘立柱建物、回廊部分、柱穴。中世の整地層。	－	37
30	試掘	2000/03/08 ～2000/03/09	京都市文化財保護課	－	平安の石列(基壇状遺構)、溝、土坑、自然流路、焼土。	－	38
31	試掘	2001/02/21 ～2001/02/22	京都市文化財保護課	－	平安～中世の自然流路、溝。	平安～中世の瓦、土師器、須恵器、天目茶椀。	39
32	試掘	2001/03/28	京都市文化財保護課	22	時期不明の土坑。近世の溝。	－	40
33	試掘・立会	2002/11/01	京都市文化財保護課	－	古代の土坑、整地層。中世の整地層。	古代の瓦。	41
34	試掘	2005/08/17	京都市文化財保護課	39	時期不明の紙屋川氾濫の影響。	－	42
35	発掘	2009/09/18 ～2009/10/25	関西文化財調査会	481	平安の一条大路北側溝。中世の土坑、溝。江戸の井戸、土坑。	奈良～平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉。中世の土師器、瓦器、陶磁器。江戸の伊万里。	43
36	発掘	2010/10/12 ～2010/11/09	京都市埋文研	93.5	飛鳥～奈良の溝(寺域北限)、土坑。平安の建物、柱穴。室町の土坑、門遺構、掘。	石器。平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉。室町の土師器、輸入陶磁器、釘。	44
37	試掘	2012/04/20 ・2012/05/14	京都市文化財保護課	－	平安の溝(寺域南限)、土坑、流路。	－	45
38	発掘	2013/10/08 ～2013/10/22	古代文化調査会	112	鎌倉～明治の土坑、柱穴。	鎌倉～明治の土師器、須恵器、陶磁器(キリスト教関連)。	46
39	発掘	2017/02/15 ～2017/03/31	京都市埋文研	181	平安の土取り穴、井戸、建物、柵。中世の溝。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉、灰釉、鉄釘、銭貨。江戸の瓦、銭貨。	47
40	発掘	1995/01/05 ～1995/05/02	京都市埋文研	855	飛鳥～奈良の溝。平安の建物。室町の溝、柵、垣塀。江戸の溝。	石器。飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉、墨書土器、輸入陶磁器、鉱滓。室町の土師器、瓦器。	48
41	発掘	2018/09/25 ～2018/11/09	京都市埋文研	約195	平安の溝、土取り穴、整地層、柱穴、ピット。	弥生土器。平安の瓦、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉、灰釉、鉄製品。	49
今回の調査地	発掘	2023/05/29 ～2023/07/28	京都市埋文研	297	平安の建物、溝、土坑、柵。室町の溝、土坑、柵、整地。江戸の地鎮遺構。	飛鳥～平安の瓦、土師器、須恵器、緑釉、灰釉、輸入陶磁器、鉱滓。室町の土師器。江戸の墨書土器。	本報告

※ 調査・試掘・立会は多数にわたっており、今回は、遺構が検出されているものに限り提示する。

京都市埋文研：財団法人・公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

中には、鉄滓を主とし、飛鳥時代の土師器や瓦などを少量含んだ焼土や炭の堆積層が確認される例もあり、製鉄に関連する施設の存在を推定させる。また、遺物の中には二彩陶器片も含まれていた。

調査19は、前述した調査18の南側に隣接し、そこで確認されていた土壇の南側延長部が検出された。

調査21・３・13では、調査10・15・５などで検出された飛鳥時代から奈良時代にかけての南北方向の溝のさらに東で、平安時代の南北方向の溝が検出された。方向はやや異なるが、位置と、長い距離を直線的に開削していることから当該期の寺域東限を画する溝の可能性が指摘されている。

調査22では、築地の可能性がある壇状遺構、土取り穴と推定する土坑群を検出した。

調査24では、奈良時代以前の竪穴建物のほか、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物群を検出した。これら建物群のうち、９世紀前半の掘立柱建物には竈が伴うことから、食事調進などを行った施設であったと推定される。また、９世紀後半以降の掘立柱建物にも倉に匹敵する大型の掘形を持つ例が確認され、製塩土器が集中的に出土することを含め、周辺には僧侶らの日常生活に関わる政所のような付属雑舎が存在したと考えられている。

調査26では、平安時代の溝のほか井戸や土坑、室町時代の柱穴や土坑などを検出した。平安時代の溝は、一条大路の北側側溝と推定され、幅約12ｍと規模が大きく、その機能が注目される。なお、東へ約70ｍ離れた調査35でも延長部と考えられる溝が検出されている。井戸は３基検出され、うち、９世紀中頃から後半のSE80には、井戸枠下部に石組が残存していた。土坑は不定形をなし、そこから土師器の杯・皿類が大量に出土し、その大半に煤の付着が認められることが特徴的とされる。

調査35では、調査11や18から連接する瓦窯が営まれた谷状地形、調査26から続く平安時代の一条大路北側の側溝、室町時代の溝などが検出された。谷状地形は一条大路北側の側溝開削時までに埋められたとされ、北側の側溝も10世紀頃には整地により機能を失ったと想定されている。

調査36では、奈良から平安時代の溝や柱穴、室町時代の門や堀のほか柱列を検出した。室町時代の遺構群は、その内容と規模から比較的大きな屋敷地の存在を示すものと想定される。

調査38では、北野廃寺に関する遺構は検出されず、北野廃寺の寺域はこの地域にまでは広がらないことが確認された。

調査39では、平安時代の井戸や土坑が検出された。井戸は３ｍを超える掘形を持ち、その内側に方形と円形の枠を上下２段に組み合わせた特殊な構造を持つ。土坑群は調査地のほぼ全面で検出され、土取り穴と考えられるものであった。

調査40では、奈良時代の南北方向の溝や堰、柵や土坑が検出され、石帯や墨書土器が出土した。平安時代では回廊状の例を含む建物、室町時代では溝をはじめ柵や垣塀を検出し、室町時代の溝や柵に関しては平野神社に関わる遺構群と想定されている。

調査41では、平安時代中期の土取り穴と東西溝や柵が検出され、常住寺（野寺）造営に伴う採土と、これらの整地後に開削された寺域南限を区画する溝および柵の可能性が指摘されている。

参考文献

喜田貞吉「山城北部の條里を調査して太秦廣隆寺の舊地に及ぶ」（上）・（下）『歴史地理』第25巻１・２号　日本歴史地理学會　1915年

史迹美術同攷会「北野發掘の寺院址」『史迹と美術』第72号　1936年

藤澤一夫「山城北野廢寺」『考古學』第９巻２号　東京考古學会　1936年

梅原末治「京都市北野における廢寺阯の發見」『考古学雑誌』第26巻第10号　日本考古学会　1936年

福山敏夫「野寺の位置について」『史迹と美術』第87号　史迹美術同攷会　1938年

福山敏夫「山城国葛野郡の条里について」『歴史地理』第71巻４号　日本歴史地理学会　1938年

井本正三郎「山城北野廃寺南遺跡の研究」『考古学』第11巻－６号　東京考古学会　1941年

田中重久「野寺阯発掘調査報告」『聖徳太子御聖蹟の研究』　1944年

坂東善平「野寺址の一知見」『古代学研究』第39巻　古代学研究会　1964年

薮田嘉一郎「野寺考」『史迹と美術』第三六三・三六七・三六九号　史迹美術同攷会　1966年

田辺昭三「古墳と県主」「氏族の発展」『京都の歴史』１　学芸書林　1970年

朧谷　寿「北区概説　古代」『史料 京都の歴史』６ 北区　平凡社　1993年

網　伸也「広隆寺創建問題に関する考古学的私見」『古代探叢Ⅳ－滝口宏先生追悼考古学論集－』　早稲田大学出版部　1995年

上村和直「広隆寺－移建か山背最古の寺－」『古代寺院の移建と再建を考える』　帝塚山考古学研究所　1995年

加納敬二・小檜山一良・平田　泰『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1997年

浪貝　毅「北野廃寺と広隆寺旧境内（京都市）」『仏教藝術』第116巻　株式会社毎日新聞社　1977年

石田志郎「京都盆地北部の扇状地」『古代文化』34巻12号　財団法人古代學協會　1982年

井上満郎「付章２　北野廃寺関連する文献資料」『北野廃寺　発掘調査報告書』　京都市埋蔵文化財研究所調査報告第７冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1983年

関口　力・平田　泰「平安京の寺院」『平安京提要』財団法人古代學協會・古代學研究所　1994年

林　南壽『廣隆寺の研究』株式会社中央公論美術出版　2003年

堀　大輔「北野廃寺」「太秦広隆寺」『飛鳥白鳳の甍～京都の古代寺院～』京都市文化財ブックス第24集　京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課　2010年

西本昌弘「平安京野寺（常住寺）の諸問題『仁明朝史の研究－承和転換期とその周辺－』財団法人古代學研究會　2011年

鈴木久史「北野廃寺」『古代寺院と律令体制下の京都府～なぜそこに寺はあるのか～』第19回埋蔵文化財研究会発表資料集　京都府埋蔵文化財研究会　2013年

網　伸也「平安京と東西寺・常住寺」『都城制研究』（８）古代寺院と社寺　奈良女子大学古代学学術研究センター　2014年

文献一覧（表１　周辺調査一覧表）

１　藤澤一夫「山城北野廢寺」『考古學』第九巻第二号　東京考古學會　1936年

２　時野谷　勝「北野廢寺阯」『昭和十二年度　京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十八册　京都府　1938年

３　畑　美樹徳・木村捷三郎『北野廃寺発掘調査報告』　六勝寺研究会　1978年

４　畑　美樹徳・山口　博『北野廃寺発掘調査報告』　六勝寺研究会　1987年

５　堀内明博『北野廃寺発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第７冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1987年

６「13　北野廃寺」『昭和51年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2008年

７「42　北野廃寺」『昭和52年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

８　梅川光隆「68　北野廃寺１」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

９「69　北野廃寺２」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

10「第２章　試掘・立会調査」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2012年　※ 未報告資料

11　梅川光隆『北野廃寺跡　文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要　1979年度』　京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1980年

12「70　北野廃寺１」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2012年

13「71　北野廃寺２」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2012年

14「73　北野廃寺」『昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

15　家崎孝治「４　北野廃寺、北野遺跡」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（試掘・立会調査編）』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1983年

16　家崎孝治「５　右京北辺二・三・四坊、一条二・三・四坊と北野廃寺、北野遺跡」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（試掘・立会調査編）』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1983年

17　堀内明博・前田義明『北野廃寺発掘調査概報　昭和57年度』　京都市文化観光局　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1984年

18　堀内明博・前田義明「48　北野廃寺」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1984年

19　家崎孝治「VI　北野廃寺（RH36）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』　京都市文化観光局　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1986年

20　鈴木久男・吉崎　伸「Ｉ　第10次発掘調査」『北野廃寺発掘調査概報　昭和61年度』　京都市文化観光局　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1987年

21　鈴木久男・吉崎　伸「29　北野廃寺１」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市

埋蔵文化財研究所　1989年
22　本　弥八郎・木下保明「Ⅱ　第11次発掘調査」『北野廃寺発掘調査概報　昭和61年度』 京都市文化観光局　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1987年
23　本　弥八郎・木下保明「30　北野廃寺２」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1989年
24　久世康博「Ⅵ　北野廃寺跡（61年度 RH10）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』 京都市文化観光局　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1987年
25　堀内明博「平安京右京北辺二坊」『平安京跡発掘調査概報　昭和62年度』 京都市文化観光局　1988年
26　堀内明博「平安京右京北辺二坊」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1991年
27　木下保明「44　北野廃寺」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1991年
28　久世康博「45　北野廃寺」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1993年
29　菅田　薫「Ⅰ　北野廃寺」『北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報』 京都市文化観光局　1990年
30　菅田　薫「45　北野廃寺」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994年
31　網　伸也・南　孝雄「Ⅱ　北野廃寺跡第15次調査」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成８年度』京都市文化市民局　1997年
32　網　伸也「18　北野廃寺」『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1998年
33　吉本健吾・川村雅章「７　北野廃寺」『平成５年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年＋未報告資料
34　平尾政幸「11　平安京右京北辺二坊・北野廃寺」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1999年
35　竜子正彦「２　北野遺跡・北野廃寺１（97RH23）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成９年度』 京都市文化市民局　1997年
36　小檜山一良「３　北野遺跡・北野廃寺２（97RH65）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成９年度』京都市文化市民局　1997年
37　馬瀬智光「Ⅵ　北野廃寺　No.52」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成11年度』 京都市文化市民局　2000年
38　堀　大輔「Ⅶ　北野廃寺　No.16」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成12年度』 京都市文化市民局　2001年
39　堀　大輔「Ⅴ－３　北野廃寺・北野遺跡　No.14」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成13年度』 京都市文化市民局　2002年
40　『京都市内遺跡試掘調査概報　平成14年度』 京都市文化市民局　2000年　※ 一覧表のみ
41　堀　大輔「Ⅴ－２　北野廃寺・北野遺跡　No.54」『京都市内遺跡試掘調査概報平成14年度』 京都市文化市民局　2003年
42　『京都市内遺跡試掘調査報告　平成17年度』 京都市文化市民局　2006年　※ 一覧表のみ

43　吉川義彦・鈴木久史『北野廃寺発掘調査報告書』　関西文化財調査会　2010年
44　柏田有香「Ⅷ　北野廃寺17次調査」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成22年度』　京都市文化市民局　2011年
45　宇野隆志「Ｖ－３　北野廃寺・北野遺跡　No.81」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成24年度』　京都市文化市民局　2013年
46　水谷明子『北野遺跡』　古代文化調査会　2013年
47　中谷正和『北野廃寺・北野遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016－16　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2017年
48　平田　泰「18　北野遺跡」『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年
49　岡田麻衣子『北野廃寺・北野遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2018－８　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2018年

3．遺　　構

（1）基本層序（図版３・４）

調査地は、国土地理院の空中写真によると1950年から1986頃までは宅地、その後は駐車場として利用されている。このような状況のためか、近現代の大きな攪乱は少なく、遺構の損壊は比較的軽微であった。

調査地の現地表面は、北側の高い部分で標高60.0ｍ、南側の低い部分で標高58.7ｍである。遺構面の標高は、調査区全体では、地形の高い北側が58.6ｍ前後、南東側の低い部分で58.3ｍ前後となり、調査区南北方向約25ｍの間で0.3ｍ前後の高低差を持つ。

層序は、現地表面より0.1ｍが真砂土とその上に敷かれた砕石からなる現代盛土、0.2～0.4ｍまでが江戸時代末期から近代までの陶磁器類などを含む暗褐色系の極細砂～シルトからなる近代盛土である。基盤層は、礫を含む黄褐色系のシルトである。基盤層は紙屋川側の東に向かって傾斜しており、調査区東半では基盤層上面に、近代以降の整地層１、安土桃山時代から江戸時代初頭の整地層２、室町時代後期の整地層３が存在し、これによって地形は平準化し現況に至ることを確認した。

遺構面は、西半部では近現代盛土直下の基盤層上面が遺構面となるが、東半部は、旧地形が東側に下降することに起因し、基盤層の上に整地層１・２・３とした土層が堆積することから、これらをそれぞれ除去した段階で検出されるものが存在した。層序と遺構・遺構面との関係は、整地層３上面と基盤層上面の室町時代後期から安土桃山時代と江戸時代の遺構を第１面の遺構、整地層３除去後、基盤層上面で検出した室町時代後期以前の遺構を第２面の遺構とした。

各整地層の詳細は以下の通りである（図10）。

整地層１は、調査区南東隅から西方向へ約２ｍ、同じく北方向へ約10ｍの範囲に堆積する。層厚約0.3ｍ前後の黒褐色小礫混じり極細砂～シルトである。層中には、印判手染付磁器や、近代の陶磁器やガラス片などが含まれていることから、近代以降の整地層と考えられる。

整地層２は、調査区東側を南北方向に幅2.5ｍ以上にわたって一直線に広がる暗褐色から黒褐色系

図10　整地層分布図（１：300）

の極細砂～シルトで、さらに調査区外の東へと続く。肩部に明瞭な段差が形成されるため、この時期の土地区画がより小さな単位であったことを示す。層厚は約0.3ｍで、層中には施釉陶器瀬戸美濃の菊皿など、16世紀後半から17世紀にかけての安土桃山時代から江戸時代初頭を下限とする遺物を含む。

整地層３は、調査区東側約３分の２に堆積する暗褐色や黒褐色系極細砂～細砂混じりシルトで、整地層２より黒味が強い。西部は東西に蛇行し、下位の基盤層との層界は不明瞭となる。往時の地表面である古土壌が均された状態となっていると考えられる。層厚は約0.1～0.2ｍ、層中には、平尾政幸氏編年[1)]の京都９Ｃ段階を下限とする土師器が含まれるため、室町時代後期、16世紀を前後する頃までに形成されたと想定される。

（２）遺構の概要（表２）

試掘調査と周辺で行われた既往の発掘調査成果から、瓦窯などが構築された開析谷の延長部や、飛鳥時代から室町時代にかけての遺物が出土すると予測された。調査を行った結果、２時期の遺構面を確認するとともに、当初予測された遺構や遺物を確認した。

第１面で検出した遺構には、土坑、溝、埋納遺構などがある。土坑は不整円形のものを複数基検出した。これらのうち、土坑101からはイヌの全身骨格が１体分出土した。溝は正方位に沿う形に開削されたものを数条検出した。これらのうち、狭長なものは、耕作に伴う犂跡とも考えられる。埋納遺構70には墨書土器が埋納されており、文字から地鎮に関する修法に用いられたことが明らかである。

第２面では、平安時代前期の掘立柱建物２棟や柵２条のほか、奈良時代から平安時代前期にかけての遺物を含む土で埋められた開析谷である谷110、平安時代から室町時代の土坑や溝を検出した。２棟の掘立柱建物は、調査区北西部で互いが重なるような位置で検出した。主軸は、北に対してやや西に傾く。これらの時期は、建物や柵を構成する柱穴のうちの２基から灰釉陶器片が出土しており、平安時代前期と考えられる。

谷110は調査地北側の既往調査の検出例と一連をなす。ほぼ全体の形が知れる三彩陶器小型壷の

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構
平安時代前・中期	建物１・２、柵２・３、柱穴58・103、土坑15・16・55、溝20・50・80、谷110
平安時代後期	土坑54・60
室町時代後期以前	柵１、土坑17・26・27・35・36・38・49・100・109・117、溝19・45・57
室町時代後期 ～安土桃山時代	土坑６・７・９・10・12・13・101・109、溝５・76・79
江戸時代後期	土坑８、埋納遺構70

出土は特筆に値する。このほか、土坑54から平安時代後期の白磁の椀が出土したため、この段階の遺構の存在も確認された。

（３）第１面の遺構（図版１・12）

江戸時代の遺構

土坑８　調査区南端のほぼ中央で検出した。平面は東に頂部を持つ倒卵形である。大きさは東西、南北とも0.9ｍ、深さは0.1ｍである。断面形は皿状をなし、底面には若干の凹凸がみられる。埋土は砂礫混じり細砂～シルトの単一層で暗褐色を帯びる。遺物には染付磁器や瓦の細片がみられ、ここから江戸時代に埋没したことが知れる。

埋納遺構70（図版５・13）　調査区北部中央で検出した。平面は、直径0.3ｍ余りの不整円形で、深さは約0.2ｍ、断面形態は、角度の急な擂鉢状をなし、底面には西側に偏って長径0.07ｍ、短径0.05ｍの不整形の小穴が設けられている。また、北側の壁面には、幅0.10～0.15ｍの掘削に用いられた工具の痕跡が２段にわたって観察される。埋土は、底面に石英粒を含む締まりのない黒褐色の細砂～極細砂を敷き均す。その上に、石英粒を納めた土師器皿を互いの口縁を重ね合わせた状態とし、墨書の「中央黄帝龍王安鎮守護」の文字頭を東側に向けて水平に置き、下位と酷似する土壌で充填していた。

上下２枚の互いの土師器皿の内面には、「中央黄帝龍王安鎮守護」「三元三行三妙加持」などの墨書がある。その様相から神道の地鎮に伴う遺構であると判断された。神道の地鎮祭の修法にしたがえば、「中央黄」に相当する当該遺構を中心として、東青・南赤・西白・北黒の四隅に設置されたであろう穴[2)]などの痕跡を検出すべく周辺を精査したが、確認するには至らなかった。皿内に納められた白砂を洗滌した結果、大麦の種実を検出したが、鎮物として納められるとされる五色の幣・榊枝・大麻・散米といった有機質の遺物は確認できなかった。したがって、皿内に盛られた花崗岩由来の石英粒は、鎮物の代替として納められた可能性が高い。

遺構の時期は、２点の土師器の小皿が平尾編年の京都14Ａ段階に相当することから、江戸時代後期、19世紀の前葉頃に位置づけられる。

室町時代後期から安土桃山時代の遺構

この時期の遺構は、主に調査区東半の整地層３の上面で検出し、調査区西側の基盤層上面でも検出した。

土坑６　調査区南西端で検出し、南半は区域外に続く。平面は、楕円形と推定される。大きさは、東西0.85ｍ、南北0.65ｍ以上となる。断面は偏平な逆台形をなし、深さは0.1ｍ、底面は平らとなる。埋土は、黒褐色の砂礫混じりの極細～極粗砂の単一層である。出土遺物には細片化した土師器や須恵器があり、須恵器片には内面に滑沢が観察される転用硯と思しき破片がある。時期は、遺物に時代を示す特徴を持つ資料がないため不明だが、整地層３の上面から掘り込まれていることから考えて、室町時代後期以降となる。

土坑７　調査区南西部で検出した。平面は南北に長い楕円形で、長径1.05ｍ、短径0.8ｍとなる。

断面は浅い皿形で、深さは0.1ｍ、底面は平坦となる。埋土は暗褐色砂礫混じり細砂～シルトの単一層である。出土遺物には細片化した土師器や須恵器があるが、時期の特定は不可能で、整地層３上面から掘り込まれていることから考えて、室町時代後期以降となる。

土坑９　調査区南端部のほぼ中央で検出した。北側は攪乱で失われている。大きさは、東西1.0ｍ、南北0.35ｍ以上となる。平面は現状では半月形をなす。断面は皿形で、深さは0.2ｍ、底面はほぼ平坦となる。埋土は、黒褐色の砂礫混じり細砂～シルトの単一層である。若干の細片化した土師器片が出土したが、時期の特定は不可能である。周辺に室町時代後期以降の類似の土坑が存在することから同時期の可能性がある。

土坑10　調査区南端部で検出した。平面は直径約0.5ｍのほぼ円形となる。断面は椀形で、深さは0.1ｍである。埋土は黒褐色砂礫混じりシルト～細砂の単一層である。遺物は土師器の小片がわずかに出土したのみである。整地層３上面から掘り込まれていることから考えて、室町時代後期以降となる。

土坑12（図版５・14）　調査区中央からやや南で検出した。平面は不整円形で、大きさは長径1.2ｍ、短径0.9ｍとなる。断面は浅い皿状をなす。底面中央はやや高く、その部分で深さ0.15ｍ、周縁部の深い部分で0.2ｍとなる。埋土は黒褐色の礫混じり細砂～シルトの単一層である。遺物は詳細不明の瓦片が出土したのみで、時期の特定は不可能であるが、整地層３上面から掘り込まれていることから考えて、室町時代後期以降となる。

土坑13　調査区中央からやや南で検出した。平面は楕円形をなし、大きさは長径0.7ｍ、短径0.6ｍとなる。断面は偏平な皿形で、坑底はややくぼむ。深さは0.1ｍで、埋土は暗褐色の礫混じりシルト～細砂の単一層である。出土遺物には少量の土師器と瓦片とがある。時期の特定は不可能であるが、整地層３上面から掘り込まれていることから考えて、室町時代後期以降となる。

土坑101（図５・６、図版５・14）　調査区北東角付近で、整地層２の下層、谷110埋積土上面で検出した。平面は、北西から南東方向に長い不整楕円形で、大きさは長径0.8ｍ、短径0.4ｍである。断面形は浅い皿状で、深さは約0.1ｍである。中にはイヌ１体分の全身骨格が指骨まで揃って遺存し、周囲には整地層２とした黒褐色系の極細砂～シルトが堆積していた。

イヌは体躯を北西に向け、胸椎をわずかに曲げた状態で前脚と後脚とを南側に向けた横位の状態で検出し、頭蓋は頸椎を西側に大きく屈曲させ頭頂を西に向けた状態であった。その出土状況に鑑み、図６の写真に示すように、脆弱化した骨に樹脂を塗布して補強したのち土坑全体を切り取るべく、周囲を掘り下げ土壌ごと発泡ウレタンで固形化して取り上げた。骨格から知れるイヌの諸元については後節に詳述するが、細部に至るまでの全身骨格を揃った状態で検出したことや、頸椎を無理な状態にまで曲げてまで頭蓋を西方に向けていることから、死後、骨化する前に人の手によって埋葬されたと考えられる。

時期は、伴出遺物がないため特定できないが、整地層２の下層で検出したことから、安土桃山時代以前であることがわかる。

溝５（図版５・14）　調査区南西部で検出した。東西方向の溝である。西側は調査区外へ続くた

め、5.5ｍ分を検出したにとどまるが、調査区内の標高差からは西から東に流れていたと判断される。大きさは幅0.5ｍ前後、深さ0.15ｍで、断面は偏平な椀形となる。埋土は暗褐色の細砂～シルトで、拳大から径20㎝程度の礫を多く含み、その中には一本作りによる複弁四弁蓮華文軒丸瓦や、平安時代前期の均整唐草文軒平瓦も含まれていた。このほかにも土師器や須恵器の破片、砥石の断片が出土した。遺構の時期は、埋土中に平安時代の軒瓦などを含むものの、整地層３上面から掘り込まれていることから考えて、室町時代後期以降となる。

溝76　調査区北半の中央から北で検出した。東西方向を長軸とする。大きさは、長さ2.4ｍ、幅0.15ｍ、深さは0.1ｍに満たない。断面の形状は偏平な「Ｕ」字形で、埋土は黒褐色シルトである。性格については、形状や断面形などの様相から耕作に伴う犂溝である可能性が考えられる。遺物が出土しなかったため時期は特定できないが、整地層３上面から掘り込まれていることから考えて、室町時代後期以降となる。

溝79　調査区中央からやや北で検出した。南北方向を長軸とする。大きさは、長さ1.9ｍ、幅0.1ｍ、深さ0.05ｍとなる。断面は偏平な「Ｕ」字形で、埋土は黒褐色の極細砂混じりシルトである。性格については、前記の溝76との共通性が看取されるため、耕作に伴う犂溝の可能性が高い。遺物が出土しなかったため時期は特定できないが、整地層３上面から掘り込まれていることから考えて、室町時代後期以降となる。

（４）第２面の遺構（図版２・15）

室町時代後期以前の遺構

当該時期の遺構は、すべて基盤層上面で検出した。一部の遺構は、出土遺物がなく時期の特定が困難であるが、整地層２・３の下層で検出していることから、室町時代後期以前とした。

柵１（図版６・17）　調査区南東部で検出した。南北方向の柵である。柱間は５間、長さ7.2ｍであるが、北端、南端ともに調査区外へ続く可能性がある。主軸は北に対して東へ5.5度振る。柱間は北から1.3・0.8・1.2・2.0・2.0ｍと不揃いである。柱穴の形状は不整円形で、大きさは0.2～0.3ｍ、深さは0.1ｍ前後となる。掘形の埋土は黒褐色系の締まりのない極細砂～シルトで、このうち柱穴33には、直径0.15ｍの柱痕が観察された。時期は、微細な土師器片などが出土したのみで不明であるが、掘形底面に注目した場合、地形に即して北から南へ約0.2ｍ低くなっており、これを整地層２により平準化される以前の地形に合わせた状況を反映していると捉えるならば、安土桃山時代以前に位置付けることが可能となる。また、後述する平安時代の柵２・３と比較すると、遺構方位が異なり、掘形の規模・形状が小型で柱間もバラツキが大きいことから、それよりも時期は新しいと思われる。

土坑17（図版７）　調査区南半の南西で検出した。攪乱によって中央から南、全体の約４分１を失う。平面は北側が隅丸方形状、南側が下部のすぼまった「Ｕ」字状となる。大きさは、長径6.2ｍ、短径2.15ｍとなる。断面は、深さ0.2ｍ弱の偏平な皿状をなし、坑底はややくぼむ。埋土は、褐色から暗褐色の極細砂やシルト２層からなり、下層には拳大の礫を多く含む。出土遺物には時期不

明の土師器や瓦の小片がある。整地層３除去後に検出したため、室町時代後期以前に位置づけられる。

土坑26　調査区南東部隅で検出した。土坑の東と南は調査区外へ続く。平面は不整形、大きさは東西1.5ｍ以上、南北３ｍ以上、深さ0.8ｍである。掘形の肩口はほぼ垂直で、坑底には凹凸がある。埋土はにぶい黄褐色極細砂～シルトと黒褐色シルトを主とする。出土遺物には、平安時代前期から中期の土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦の小片がある。近隣調査（表１－39・41）で同時期の土取り穴が検出されており、この土坑も形状から土取り穴の可能性がある。

土坑27　調査区南東部で検出した。平面は東西に長い隅丸方形で、大きさは長辺0.75ｍ、短辺0.4ｍ、深さは0.1ｍである。断面は偏平な逆台形をなし、坑底は平らとなる。埋土は、黒褐色極細砂～シルトの単一層で、そこから細片化した土師器が出土したが時期の特定可能な資料は含まれていなかった。整地層３除去後に検出したため、室町時代後期以前に位置づけられる。

土坑35　調査区南東部で検出した。平面は北東から南西に長軸を持つ不整形な隅丸長方形状をなす。大きさは長辺1.65ｍ、短辺0.85ｍである。断面は、深さ0.05ｍで、極めて偏平化した逆台形をなす。埋土は、黒褐色礫混じり極細砂～シルトの単一層で、出土遺物には少量の土師器や須恵器、瓦の小片がある。

土坑36　調査区南東部で検出した。平面は西辺が攪乱を受け不明となるが、東西に長い隅丸方形状とも思われる。大きさは、長辺側の東西で0.9ｍ弱、短辺側の南北で0.65ｍとなる。断面は北側に偏った皿状をなし、深さは0.1ｍ、坑底はゆるやかにくぼむ。遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明だが、整地層３除去後に検出したため、室町時代後期以前に位置づけられる。

土坑38（図版７）　調査区南東部で検出した。平面は東西に長い不整形で、長径1.1ｍ、短径0.8ｍとなる。断面は北西側がやや深い船底形で、最深部で0.15ｍ弱である。出土遺物はないが、整地層２・３除去後に検出したため、室町時代後期以前に位置づけられる。

土坑49　調査区南半の中央やや北西で検出した。平面は北西から南東に長い楕円形で、大きさは長径0.6ｍ弱、短径0.4ｍとなる。断面は皿状で、深さ0.1ｍ、埋土は暗褐色細砂～シルトの単一層である。時期は土師器の小片が若干出土したのみで詳細は不明ながら、整地層３除去後に検出したため、室町時代後期以前に位置づけられる。

土坑100（図版７）　調査区北東部で検出した。平面は北西から南東に長い楕円形で、大きさは長径1.1ｍ、短径0.65ｍである。断面は上位の開いた「Ｕ」字状で、深さ0.4ｍ弱となる。埋土は２層に分けられ、いずれも拳大以下の礫を含む暗褐色の極細砂混じりシルトである。出土遺物はないが、整地層３除去後に検出したため、室町時代後期以前に位置づけられる。

土坑109（図版６）　調査区北端中央からやや東で検出した。南側の一部を検出したのみで、他の部分は調査区外となる。平面は円形状と推定され、大きさは東西1.55ｍ以上、南北0.5ｍ以上である。断面は偏平な逆台形で、深さ0.25ｍ、坑底は平らとなる。埋土はにぶい黄褐色極細砂～シルトの単一層で、土師器、須恵器杯Ｂの高台部、瓦の破片が出土した。時期は、後述する谷110埋土上面から掘り込まれることからそれよりは新しい。

土坑117　調査区北部中央で検出した。平面は不整な円形状で、大きさは東西、南北とも約0.9ｍである。断面は凹形をなし、坑底は平坦となる。埋土は褐色から黒褐色系の極細砂～シルトで３層に細分され、幾度か掘り直された状況が看取される。出土遺物には瓦片がある。ここから詳細な時期はうかがえないが、整地層３除去後に検出したため、室町時代後期以前に位置づけられる。

溝19（図版８）　調査区南西部で検出した。東西方向に軸をとおし、長さ1.7ｍ、幅0.5ｍ、東側は整地層３によって削平される。断面は底部が船底状となった偏平な「Ｖ」字形で、深さ0.2ｍとなる。埋土はにぶい黄褐色の極細砂～シルトの単一層である。遺物には土師器や須恵器のほか、瓦の破片がある。時期の特定は不可能であるが、整地層３除去後に検出したため、室町時代後期以前に位置づけられる。

溝45（図版８）　調査区南半の中央部で検出した。東西方向に長さ3.8ｍ、幅0.5ｍにわたって開削され、西部を第１面の溝５によって削剥される。断面は偏平な「Ｕ」字状をなし、深さは0.15ｍとなる。埋土は、暗褐色の礫混じり極細砂～シルトの単一層である。遺物が出土しなかったため時期は特定できないが、整地３除去後に検出したため、室町時代後期以前に位置付けられる。さらに、この溝の埋土を除去した段階で平安時代後期の土坑60を検出したため、平安時代後期以降、室町時代後期以前に開削されたと判断される。

溝57　調査区南東部で検出した。東西方向に軸をとおし、長さ2.7ｍ、幅0.25ｍの大きさとなる。断面は隅丸の矩形で、深さは0.1ｍ、埋土は黒褐色の礫混じり極細砂～シルトである。出土遺物には土師器、瓦がある。

平安時代の遺構

建物１（図版９・16）　調査区北西部で検出した。南北棟の掘立柱建物である。桁行３間、梁行２間の側柱建物で、柱間寸法は梁行約2.0ｍ、桁行2.0～2.1ｍ、床面積はおよそ26.5㎡である。主軸方位は、西側柱列は溝80ならびに攪乱により失われていること、柱通りが非常に悪いことなどから確定し難いが、北に対して西へ８度前後傾くと推定される。柱掘形の形状は、不整円形から歪んだ隅丸方形状で、大きさは、長径0.6～0.9ｍ、短径0.5ｍ前後。深さは0.05～0.4ｍと概して浅く、相応の削平を受けている。埋土は、褐色から黒褐色系の極細砂～シルトを基本とし、礫を含む箇所も多い。柱痕は直径0.2ｍ前後、東辺と南辺の柱穴で確認した。これらは掘形埋土よりも褐色の度合いが強い。なお、北東角柱の柱穴104では、柱を抜き去った後に円礫数点を落とし込んでいる状況が観察され、そのうち２点の礫の表面には被熱痕跡が認められた。建物北妻側の柱穴116と建物２柱穴123との重複関係から、建物１が先行したことわかる。時期は、後出する建物２の柱穴123掘形から平安時代前期の灰釉陶器が出土していること、また、西側柱列の柱穴83・136が９世紀前葉の遺物が出土する溝80により削平されていることなどから、平安時代前期に位置づけられる。

建物２（図版10・16）　調査区北西部で検出した。南北棟の掘立柱建物である。規模は、桁行３間、梁行２間の側柱建物で、北側梁の棟持柱となる柱穴は攪乱により、南側の梁となる柱穴94の上位は溝80によって失われる。柱間寸法は、北梁側が3.6ｍ、梁南側が東より1.6ｍと2.0ｍの不等間。東西の桁行は、2.3～2.5ｍの不等間となるが、双方とも総長7.2ｍのため、2.4ｍ（８尺）を基本と

していることがうかがえる。床面積は約26.0㎡である。主軸方位は、北に対して西へ７度振る。柱掘形の形状は、不整円形から歪んだ隅丸方形状をなし、総じて西側柱穴のほうが小さい。大きさは、長径0.3～0.8ｍ、短径0.3ｍ、深さは0.05～0.7ｍと不揃いで、全体的に掘り込みが浅い傾向にあり、建物１と同様、かなりの削平を受けていることを表す。埋土は、褐色から黒褐色系の極細砂～シルトを基本とし、礫を含む箇所も多い。柱痕は、直径0.15～0.20ｍである。遺存状況の悪い南西隅柱では確認できなかった。埋土は、掘形埋土よりも色調が暗く、均質な土質である。なお、柱穴123の掘形内の礫には被熱痕跡をとどめるものがあり、建物１の柱穴104との関連性がうかがえる。建物１と重複関係をもつが、先述のとおりこの建物２が新しい。時期は、柱穴123掘形出土の灰釉陶器の壷底部片や、これに先行する溝80出土遺物からみて、平安時代前期を上限とするものと考えられる。

柵２（図版11） 建物２の東側に沿うように検出した。南北方向の柵である。柱間４間、長さ9.7ｍである。主軸は北に対して西へ6.5度振る。この方向は建物２とほぼ同じだが、相互の距離が0.9ｍしか離れておらず、軒の出を考慮するならば併存は考えられない。柱間寸法は、北側から2.4・2.7・2.4・2.2ｍ、柱掘形の形状は不整円形で、大きさは短径0.25ｍ、長径0.6ｍ程度、深さは0.1～0.3ｍである。埋土は暗褐色系の極細砂混じりシルトを主とし、一部に礫を含む。柱痕は、直径0.1～0.2ｍ、南側の２基を除いて確認された。時期は、遺物がないため明確でないが、主軸方位や柱穴形状から建物１・２に近しいと想定される。

柵３（図版11） 柵２の西側に近接して検出した。南北方向の柵である。柱間４間、長さ8.5ｍである。主軸は北に対して西へ10度振る。柱間寸法は、北から1.5・2.3・2.2・2.5ｍと不揃いである。柱掘形の形状は、不整円形からいびつな隅丸方形状をなし、大きさは短径0.4ｍ、長径0.6ｍ前後で、深さは0.2～0.5ｍである。埋土はにぶい黄褐色から褐色系の小礫混じり極細砂～シルトを主とする。柱痕は直径約0.2ｍ、柱穴93・140・141で確認した。埋土は掘形よりも暗色を帯びている。なお、柱穴140柱痕内の礫は側面が被熱していた。時期は柱穴132掘形から出土した灰釉陶器の壷片から、平安時代前期の９世紀代に位置づけられる。

柱穴58（図版７） 調査区南西部で検出した。平面は隅丸方形で、大きさは長辺0.6ｍ、短片0.5ｍ、深さ0.4ｍである。柱痕は、直径0.2ｍである。時期は、平尾編年の京都３Ａ段階の土師器皿が出土したことにより、平安時代中期の10世紀中頃に位置づけられる。

柱穴103 調査区北部中央で検出した。平面は東西に長い隅丸方形で、大きさは一辺0.5ｍ、深さ0.5ｍである。柱痕は、掘形東側に偏る位置で検出した。直径0.2ｍである。時期は、埋土中から土師器の小片が出土したのみでそれ以上の詳細は不明ながら、規模形状から建物１・２に近いと考えられる。

土坑15（図版７） 調査区南西部で検出した。平面は隅丸長方形で、長軸を北東から南西方向にとおす。大きさは、長辺1.1ｍ、短辺が0.9ｍである。断面は浅い皿形で深さは0.15ｍ、坑底は中央がくぼむ。北東部は重複する柱穴58によって一部を失う。出土遺物には平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦の細片がみられる。ここから詳細な時期は推し量れないが、重複する柱穴58から

平尾編年の京都３Ａ段階の皿が出土したことにより、平安時代中期の10世紀中頃以前に位置づけられる。

土坑16（図版７） 調査区南西部で土坑15ならびに第１面の溝５と重複して検出した。大きさは東西0.8ｍ以上、南北1.9ｍ以上、西部は調査区外となる。土坑15との前後関係はそれに先行する。断面は北側の傾斜が急となる皿形で、坑底は平らである。深さは0.6ｍ弱で、埋土は黄褐色から暗褐色系の極細砂～シルトを主とするが、北側には埋没過程で再掘削が行われた様相が看取される。出土遺物には土師器や須恵器、瓦の破片がある。ここから詳細な時期は推し量れないが、重複関係から、10世紀中頃以前の土坑15よりも先行することがわかる。

土坑54（図版７・17） 調査区南西部で土坑17の埋土除去後に検出した。平面は北西から南東に長い楕円形で、大きさは長径0.8ｍ、短径0.7ｍである。断面は上方に広がる「Ｕ」字形をなし、深さは0.6ｍである。内部は拳大の円礫や瓦で充填され、一部に空隙が観察された。埋土は暗褐色の粗砂混じり極細砂～シルトで、瓦礫の隙間に夾雑するような状況であった。瓦礫の中には、平安時代前期の西賀茂角社瓦窯産軒平瓦や、難波宮式の重郭文軒平瓦などの軒瓦類が含まれ、これらとともに、華南のいずれかの窯で生産された白磁椀の底部片が出土した。時期は、室町時代後期以前に位置づけられる土坑17の埋土を除去した段階で確認されたことや、輸入陶磁器の年代観から、平安時代後期の11世紀末から12世紀前半代に位置づけられる。遺構の性格としては、瓦礫を処理するための瓦礫廃棄土坑、または後述する土坑60と対をなす遺構となる可能性もある。

土坑55（図版７） 調査区南端で検出し、南側は調査区外へと続く。大きさは東西4.4ｍ、南北2.5ｍ以上である。埋土は、にぶい黄褐色から黒褐色の礫や炭を含む極細砂～シルトを主とし、中位には団粒状の土塊が観察される層序も観察されたため、人為的に埋め戻されたと考えられる。出土遺物には土師器や須恵器のほか、灰釉陶器や瓦がある。図版７断面図の第１層から須恵器の把手を含む平瓶各部位の破片が集中して出土している。それらは、胎土や形状の違いから、少なくとも２個体分が存在するが、いずれも細片化し図化不可能である。遺構の時期は、出土した須恵器の平瓶などから平安時代前期に位置づけられる。

土坑60（図版７・17） 調査区南西部で溝45の埋土除去後に検出した。平面は不整な円形状をなし、大きさは長径0.75ｍ、短径0.7ｍである。断面は中央から下位にわずかな段差を設けた「Ｕ」字状で、深さは0.4ｍである。坑底は椀底状をなす。埋土には、拳大の円礫や瓦を多数含み、その隙間に黒褐色粗砂混じり極細砂～シルトが介在する状況で、これらの間には一部空隙が観察された。出土遺物には、土師器や須恵器、瓦の破片がみられ、これらの中には、平安時代前期の均整唐草文軒平瓦も含まれていた。時期は、出土した瓦は平安時代前期だが、大きさや形状、礫石が充填される状況が土坑54と酷似することに加え、それと近接する位置にあるため、平安時代後期と考えられる。

溝20（図版８） 調査区南西部で検出した。北東から南西に長く、大きさは、長さ2.45ｍ、幅0.5ｍである。断面は隅丸の逆台形状をなし、深さは0.2ｍである。埋土は暗褐色礫混じり極細砂～シルトの単一層で、その中から土師器や黒色土器Ａ類、瓦片が出土した。いずれも細片のため、詳細

な時期は決めがたいが、平安時代前期と考えられる。

溝50（図版８） 調査区全体のほぼ中央で検出した。南北方向の溝である。遺構方位は正方位である。確認した長さは16.7ｍだが、北側は削平のため失われ、南側は攪乱などのため全体をうかがえない。大きさは、幅0.8～1.0ｍ。断面は偏平な皿形を基本とし、深さは0.1～0.2ｍである。埋土は、にぶい黄褐色から暗褐色系の粗砂や礫混じり極細砂～シルトで、その中から土師器や須恵器、緑釉陶器、瓦の破片が出土した。ここから詳細な時期は推し量れないが、重複する平安時代後期の土坑60に先行することから、平安時代後期以前に位置づけられる。

溝80（図版８） 調査区の西際で検出した。ほぼ全域に攪乱がおよぶため不明確だが、主軸をやや北から西へ傾けながら、長さ13.4ｍ以上、幅2.0ｍ以上の大きさとなる。北はさらに調査区外へ続き、南端は調査区中央からやや南で消滅する。断面は浅い皿状をなし、深さは0.1ｍ前後である。埋土は２層に細分され、いずれも黒褐色を基本とする礫を含んだ極細砂混じりシルトや極細砂～シルトである。埋土からは、須恵器や土師器、緑釉陶器のほか、瓦が出土した。須恵器には図化不可能であったが、平瓶の把手片などが含まれていた。時期は、緑釉陶器が平安時代前期の９世紀に位置づけられること、その他の須恵器もほぼ同時期とみなされるため、この段階までに埋没したと考えられる。

谷110（図版６・18） 調査区北東部で検出した。谷状の地形の南西肩部である。検出規模は、東西4.9ｍ以上、南北7.0ｍ以上、深さ1.45ｍである。既往の周辺調査で、北西および南東連接部が確認されており、飛鳥時代から平安時代の瓦や土器類などが多数出土している。今回の調査でも鬼板片を含む大量の瓦類や土器類が出土したため、調査区を北側へ拡張した。

拡張した結果、わずかに確認できた底面の状況から、今回の調査区から北側の調査11に至る平面形は、拡張区内で西から北に折れ曲がり、鍵の手状をなして連なると推定された。東側の調査18や、南東側の調査35でも、同様の屈曲部が観察されるため、旧来の谷地形を改変しながら、このような形状を作り出していた可能性も考えられる。北東拡張区の南北断面（図版６下段　Ｃ－Ｃ’）では、上半は比較的緩やかに傾斜するが、下半の肩部は急角度をなし底面は平坦となる。また下半部の堆積層は、溝底まで自然堆積層は観察されず、古土壌の形成も認められなかったことから、先の平面形の状況とともに、人工的に維持管理されていた状況をうかがわせる。

埋土は10層以上に細分される（北東拡張区西壁Ｃ－Ｃ’）。炭をまじえる第６層を境として様相が若干異なるため、ここで改削が行われたか機能している期間が長かったことを想定させる。

第１層は、厚さ約0.1ｍの明褐色極細砂～シルトである。第２層は、厚さ0.1ｍ前後のにぶい黄褐色極細砂混じりシルトで、この層には細かな団粒状構造が観察されるため、埋め立てに伴う客土と考えられる。

第１層の層中には焼土や炭とともに、焼けた瓦や壁土が含まれるため、火災によって生じたものであることは明白である。ただし、層中に包含される遺物の中には、二次的な被熱痕跡のない須恵器、土師器や瓦片が含まれており、直下の第２層上面は、被熱も固化もしていないため、この場所そのものが罹災したのではなく、周辺の火災で生じた廃棄物を持ち込んで敷き均したとものと判

断される。さらに、第２層上面には古土壌の形成もほとんど観察されないため、比較的短期間のうちに第１層の焼土などが運び込まれたと想定される。

遺物は各層準より出土したが、第２層を境として様相が異なる。第１層からは、大量の焼けた瓦などが出土し、それらとともに、土師器の皿や緑釉陶器、灰釉陶器、底部に回転糸切痕を残す多数の須恵器の瓶子の細片、平安時代前期までの軒丸瓦・軒平瓦が出土した。第２層より下層からは大量の遺物が出土した。土師器の皿や甕、緑釉陶器の椀、須恵器の壷や杯、瓶子、三彩陶器の小型壷、大量の瓦片が出土した。瓦類では、飛鳥時代から平安時代前期にかけての軒丸瓦・軒平瓦、鬼板がある。また、最下層から鉄滓が２点出土した。

瓦類には、二次焼成を受けたものや、いわゆる生焼状態のもの、過度の焼成により焼け歪みや亀裂の生じたもの、表面に砂混じりの焼土が付着したものがみられた。これらは北側の窯群操業に伴う生産焼成不良品、焼成失敗品、窯構築材としての転用品にそれぞれ相当する。

なお、層中に真紅の赤色顔料が薄層状をなした状態で点在したため、遺存状況の良い部分から試料を採取し分析を行ったところ、辰砂と判明した（第４章参照）。

出土遺物の時期については、第１層が平安時代前期の９世紀中頃、第２層以下が平安時代前期の９世紀前半に位置づけられる。

註

１）　平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年

750年			840年			930年			1020年			1110年	1170年		1260年			1350年	1410年		1500年			1590年			1680年	1740年	1800年	1860年
1			2			3			4			5		6			7			8		9			10			11			12	13	14
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	A	B

２）　a.下中彌三郎編『神道大辭典』平凡社　1937年

b.園田稔・橋本政宣編『神道史大辞典』吉川弘文館　2004年

c.新田惠三「吉田神道三壇行事の構成と加行」皇學館大学論叢第五十二巻第六号　2019年

４．遺　　物

（１）遺物の概要（表３）

遺物は遺物収納コンテナで53箱出土した。遺物の種類は、瓦類を主とする。以下、土器類、土・石・金属製品、動物遺存体（イヌの骨）の順となり、土・石・金属製品は数点のみである。これらの中には銅滴や鉄滓のほか、須恵器の漆容器などがある。量的には谷110から出土した瓦が８割以上を占める。そのほかの土器類については、いずれもコンテナ１箱に満たず、完形に復される資料はない。

遺物の中で最も古いのは、谷110から出土した飛鳥時代の素弁十葉蓮華文軒丸瓦と、凸面に格子や斜格子タタキのみられる瓦である。続く段階のものに山田寺亜式とも称される重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦がある。

奈良時代の遺物には瓦類がみられる。種類には軒丸瓦・軒平瓦と縄目タタキ瓦がある。これらのうち最も遺存状態が良いのは興福寺式の均整唐草文軒平瓦である。このほか、平城宮式の均整唐草文軒平瓦や難波宮所用の重郭文軒平瓦も出土した。

なお、特殊な遺物に三彩陶器の小型壷がある。肩部に稜を作り出すなどこれまでに類例を見ない形態となるため、三彩でも新しい段階の資料とも考えられる。

平安時代の遺物には瓦類に加えて、土師器や須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器がある。瓦には、軒丸瓦・軒平瓦の双方があり、西賀茂角社瓦窯産とみられる均整唐草文軒平瓦のほか、小片ながら、中

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
飛鳥・奈良時代	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦		軒丸瓦４点、軒平瓦４点、平瓦６点		
平安時代前・中期	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、三彩陶器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦、土製品、金属滓		土師器10点、須恵器33点、緑釉陶器５点、灰釉陶器６点、三彩陶器１点、軒丸瓦２点、軒平瓦５点、道具瓦２点、土製品３点、金属滓５点		
平安時代後期	輸入陶磁器、石製品		輸入陶磁器１点、石製品１点		
室町時代	土師器		土師器２点		
安土桃山時代	動物遺存体				
江戸時代	土師器、石製品		土師器２点、石製品２点		
合　計		62箱	94点（９箱）	０箱	53箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より９箱多くなっている。

心飾りに「大伴」あるいは「左寺」銘が類推される軒平瓦がある。道具瓦には鬼板がある。このほか、若干の金属製品があり、先述した鋳造に関連するともみられる銅滴のほか、鉄釘や鉄滓もみられる。

室町時代の遺物には整地層３から出土した土師器の皿がある。

江戸時代の遺物には埋納遺構70出土の地鎮遺構に埋納されていた墨書土師器の小皿２点がある。

（２）土器類（図11～13、巻頭図版１、図版19、付表１）

埋納遺構70出土土器（図11、巻頭図版１、図版19　１・２）　１・２は土師器の皿である。１・２ともに完形品である。胎土は近似し、形もほぼ相似形だが、上蓋とされていた１の口径が下皿とされていた２よりも0.3㎝小さい。上蓋の墨書は鮮明だが、下皿の墨書は、石英粒に接していたためか、やや薄い状態となる。１・２ともに、内面中央に「中央黄帝龍王安鎮守護」と一行書きされ、さらに、口縁部内面外側の縁に沿って「三元三行三妙加持」の文字が途中、縦書きの「護」の文字により「三元三行」「三妙加持」に隔てられながら右回りに３度記されている。その内容から地鎮に伴う儀器と考えられる。時期は平尾編年の京都14Ａ段階、19世紀前葉に位置づけられる。

整地層３出土土器（図12、図版19　３～７）　細片でほとんどが占められ、室町時代の土師器と共に平安時代の須恵器・灰釉陶器などが出土した。以下、時期を示すものや特徴的なもの５点を報告する。

３と４は土師器の皿である。ほぼ同形同大で、法量や形態の様相から双方とも平尾編年の京都９Ｃ段階の皿Ｓに分類される。これらのうち、３の口縁部上位には黒変した部分が観察される。これらは整地層３出土遺物の中では比較的大きな破片で、摩耗も少なく遺存状況が良いため、この資料をもって、整地層３形成時期の下限を室町時代後期の16世紀を前後する段階と捉えた。

５は須恵器の杯蓋である。偏平化した形態的特徴から平安時代前期の９世紀代に位置づけられる。６は緑釉陶器の椀の底部から高台の破片である。橙色で軟質の素地全体に暗緑色の釉が施されること、貼り付け輪高台の形態から、平安時代中期、10世紀後半の近江・美濃産の製品と考えられる。７は全形のうかがえる灰釉陶器の椀である。高台内側には輪トチンが溶着していた痕跡が観察されるが、内面にはそれが確認されないことから、最上段で焼成されたと判断される。形態的特徴から９世紀中頃から後半にかけての猿投窯産の製品と考えられる。

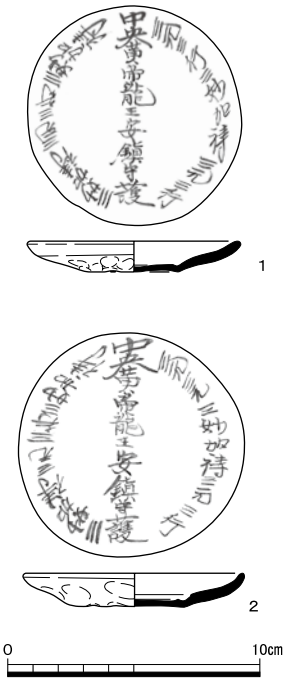


図11　埋納遺構70出土土器実測図（１：３）

土坑54出土土器（図12　8）　底部から腰部の下位が遺存する白磁の椀の破片である。内面は全面に、外面は腰部下半まで施釉される。磁胎や釉調からみて華南の諸窯からの輸入品とみなされる。時期は、高台の大きさや形状、内面の段差が明瞭であることから、平安時代後期の11世紀末から12世紀代の製品とみなされる。

柱穴58出土土器（図12　9）　ほぼ全形の知れる土師器の皿である。遺存する部位も多く、破断面の磨滅が少ないことから、時間を経ずして埋もれたものと考えられる。形態と法量から、時期は平尾編年の３Ａ段階、平安時代中期の10世紀中頃と考えられる。

柱穴132（柵３）出土土器（図12　10）　底部から腰の一部が遺存する破片である。焼成や色調などから灰釉陶器と考えられる。器種としては貼り付け高台となる壷を想定しているが、腰の開きが大きいため他の器種となる可能性もある。時期は、平安時代前期の９世紀代に位置づけるのが妥当と考える。

柱穴123（建物２）出土土器（図12　11）　高台から腰部が遺存する壷である。色調や焼成から東海産の灰釉陶器と考えられる。詳細な時期までは判然としないが、平安時代前期頃とみなされる。この考えは、柱穴123から構成される建物２の廃絶後に開削された溝80より、平安時代前期の９世紀前葉の遺物が出土していることからも補強される。

溝80出土土器（図12　12～17）　土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土した。

12は緑釉陶器の椀である。底部から腰部にかけての破片で、底部は削り出し高台である。形態や釉調から洛北産の製品と考えられる。

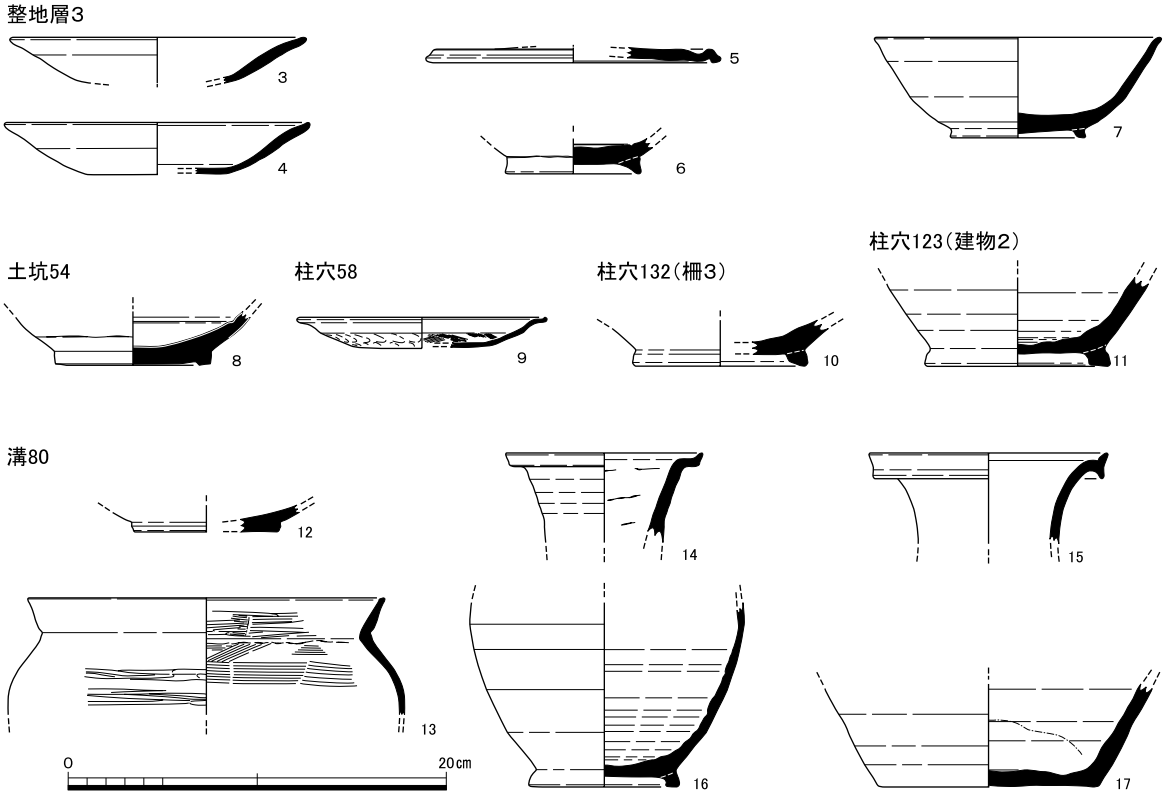


図12　整地層３、土坑54、柱穴58・123・132、溝80出土土器実測図（１：４）

13は土師器の甕である。口縁部から体部上半にかけての部位が遺存し、口縁部と体部の屈曲部分に粘土接合痕が観察されるなど、粗雑な製作手法によるものである。

14と15は須恵器の壷である。双方とも長頸壷に分類されるが、口縁端部の形状から、上方のみ拡張される14と、上下両方に拡張される15の別がある。胎土や製作技法でも両者は異なり、14は砂粒を多く含む胎土が用いられ、粘土紐を巻き上げながら成形した痕跡を明瞭にとどめているのに対し、15は精良な胎土が用いられ、端部の仕上げも整い、全体の轆轤目も整然としている。

16・17は灰釉陶器である。ともに壷に分類されるが、高台を付す16と、平底となる17の別がある。腰部の形状から類推して前者は長頸壷、後者は短頸壷と想定され、後者については底部内面に広く自然釉がかかっているため、口の広い器形であったことがうかがえる。焼成や色調の状態より、これらの２点は猿投窯産の可能性が高いと考えられる。

以上の土器の時期は、緑釉陶器の年代が９世紀中頃に近い前半、須恵器が９世紀代となり、これらに伴う土師器や灰釉陶器も、ほぼ同時期とみなされるため、平安時代前期に位置づけられる。

谷110出土土器（図13、巻頭図版１、図版19　18～60） 瓦類と比較して土器類の出土量は非常に少なく、完形に復元される資料もない。また、遺構の項で述べたように埋土の第２層（図版６北東拡張区西壁Ｃ－Ｃ’）を境として区分できたため、第１層（焼土層）出土遺物とこれより下層の第２層以下出土遺物とに分けて報告する。

第１層出土遺物（18～29）には、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器がある。

18～25・27は須恵器である。18～25は瓶子、27は鉢である。18～25の瓶子は、口縁端部形態に差異があるが、底部はすべて右回りの回転糸切りで共通する。これら以外にも図化不可能な破片が多数出土したが、いずれも細片化していることが特徴的であった。27は上外方に大きく開く鉢である。調整は非常に丁寧で、内外面に金属器模倣器種にままみられるヘラミガキ様の押圧による調整が施され、滑沢を帯びる。

26は灰釉陶器の壷である。上位の器壁は非常に薄い。下半部は焼成状態が悪く、内面は焼け膨れによる突出部の形成が激しい。色調や形態などの様相から、尾張産の製品と考えられる。なお、往時の内容物の影響によるものか、褐灰白色の石灰状となった析出物が内面下半部に付着する。

28は緑釉陶器の椀の底部片である。削り出しの平高台から高台脇の部位が遺存する。施釉は内面全体と底部外周までに及び、中央部は刷毛塗りが及ばず露胎のままである。釉調や製作手法より、９世紀前半頃、洛西地域の諸窯で生産されたされたものとみなされる。

29は土師器の皿である。口縁部などの形態や法量より、平尾編年の京都２Ｂ段階までは下がらず、また、図化不可能であった他の土師器の杯や皿類も、おおむね京都２Ａ段階までのものであることから、総体として平安時代前期、９世紀中頃の年代が与えられる。

第２層以下出土遺物（30～60）には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器のほか、特筆すべきものとして三彩陶器の小型壷がある。

30と31は緑釉陶器である。30が椀、31は鉢である。双方とも高台から腰部にかけての破片で、高台の形状は30が蛇ノ目高台、31が平高台となる。焼成は軟質で、素地や釉調、焼成の状態より

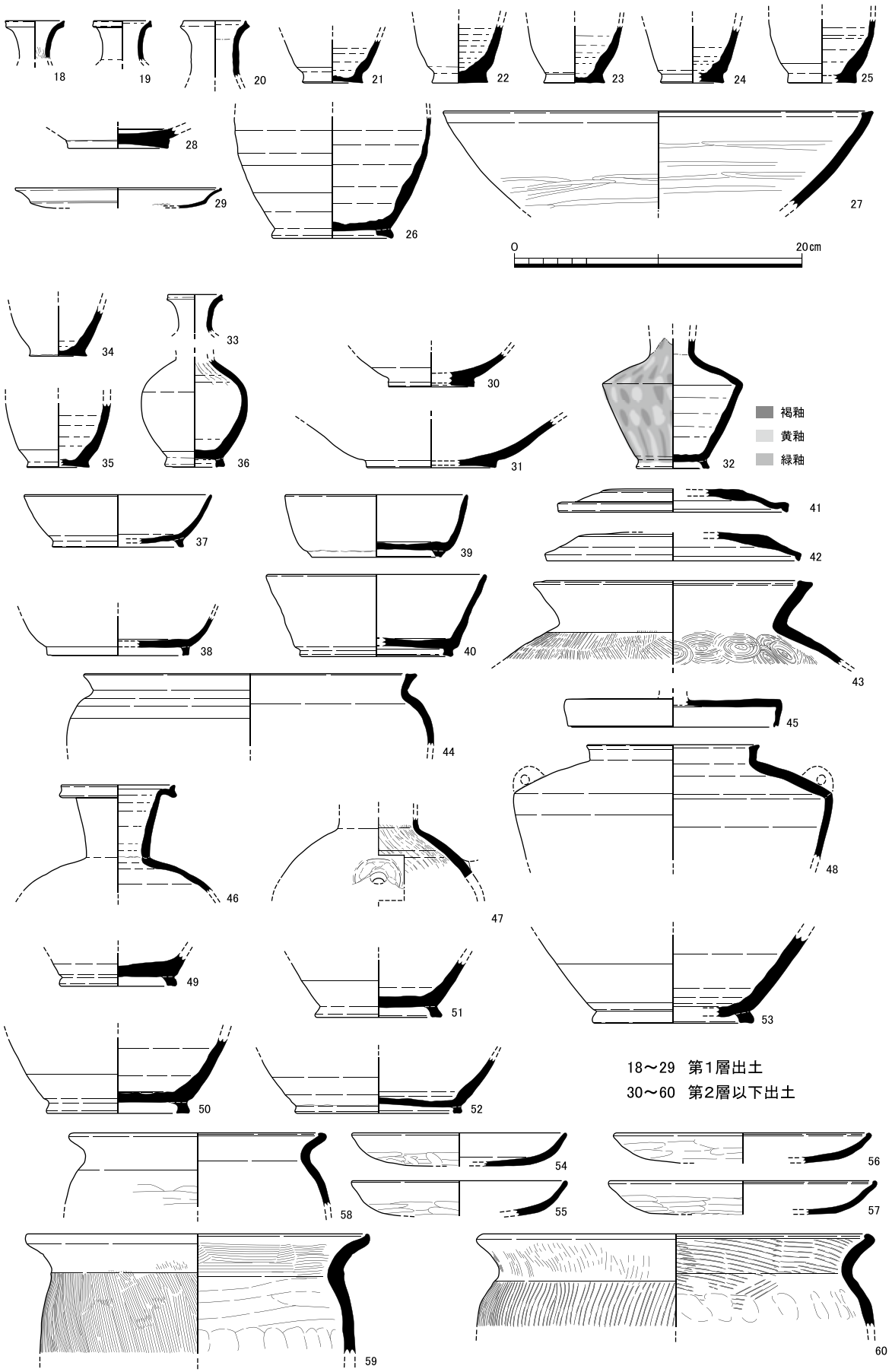


図13　谷110出土土器実測図（１：４）

平安時代前期の９世紀前半でも新しい段階に、洛北の窯で生産されたとものと考えられる。

32は三彩陶器の小型壷である。口縁部を欠くが、ほぼ全体の部位が遺存する。体部上半に明瞭な稜を作り出し、腰から頸部に至るまで直線的な形態となる。法量は、底径5.0㎝、肩部最大径9.7㎝、残存高9.0㎝となる。陶胎は浅黄橙色で、粘性が乏しいともみなされる珪砂質の素地が用いられ、焼成は良好だが、現状では脆い状態となっている。外面の肩部から体部には、長短のある楕円形の黄釉と褐釉とを交互に三段ずつ配し、その間を緑釉で充填する。頸部内面には無色透明の鉛釉が極めて薄い状態となって確認される。全体的な形状は、薬壷を小型化したような奈良三彩の共蓋の小型壷とは大きく異なり、すぼまった頸部と明瞭な稜を形作る肩部をもつ。この形状は、長頸壷や、48のような平安時代前期の双耳壷などに近しく、これまでに類例がほとんど確認されていないと思われる。栗栖野21号窯第１次操業面からは二彩陶器の多口瓶の破片[1)]、同じく13号窯からも二彩陶器片[2)]が出土しているため、あるいは、平安時代初期の所産にかかる資料かとも想定される。

33～53の21点は須恵器である。うち、33～36の４点は瓶子で、中でも36は、他の２点とは異なり、前段階的な輪高台を持つことで、第１層出土遺物との相違をみせる。37～42の６点は蓋杯で、うち、身の37・39・40の３点は図上で完形に復元され、この中でも40が形態的に最も新しい特徴を持つ。蓋は41と42の２点が図化できた。ともにつまみを失うが、双方とも残された部位は形態的に近似する。43は比較的小型の甕である。今回の調査では、破片を含めて甕の占める割合が非常に少ない。44は鉢で、口縁部や体部の形態から洛西地域の窯の製品と考えられる。45は壷の蓋で、口縁端部には印籠蓋状の段差が形作られている。46～48は壷で、それぞれ形態が異なる。46は長頸壷で、器壁など全体的に非常に薄く製作されている。47は体部上半に注口部を作り出す壷で、須恵器にはあまり類例をみない器形となる。篠窯跡群中のマル１号窯では、東海系の灰釉陶器を模したような製品も焼成[3)]されていることから、本例もこれに類する可能性も考えられる。48は短い口縁部から鋭く屈曲する肩部へと至る全体的に直線的な形態をなし、屈曲部上位２箇所には、小穴を穿った短冊形の耳が剥離した痕跡を残すことから双耳壷と判断される。口縁脇の肩部上位には重ね焼きの痕跡と、輪状をなして灰被りが及ばない部分が観察されるため、本来は蓋とともに焼成されたと判断される。49～53の５点は底部の破片である。すべて高台部を貼り付け技法で作り出し、49・50・52の底面には回転糸切痕が観察される。形態などからみて、壷の底部と考えられ、うち52は、底部内面の広範囲に釉が付着しているため、口の広い器形であったと考えられる。

54～60の７点は土師器である。54～57は皿、58～60は甕である。皿は、口縁端部がまっすぐ形作られる54と55、やや内面に肥厚させる56と57とに分類されるが、外面の最終調整技法はヘラケズリが施されることで共通する。甕は、外面の調整に58のようなヘラケズリ、59や60のような体部外面にタテハケ、口縁部内面にヨコハケを施すものの別があるが、口縁端部を摘まみ出すように成形している点では同様である。

以上の遺物は、土師器の皿が平尾編年の京都１Ｂ～１Ｃ段階に分類されるため、平安時代前期の９世紀前半までに収まり、須恵器も９世紀前半代に位置づけられるため、総体として違和感はない。

（３）瓦類（図14～16、図版20・21、付表２）

軒丸瓦（図14、図版20　瓦１～６）　４種類６点が出土した。

瓦１と瓦２は、谷110第２層以下から出土した。素弁十葉蓮華文を表す。瓦１は、接合部で剥離し瓦当面の一部を残すのみの破片である。裏面は平滑に仕上げられている。瓦２は、ほぼ全形がうかがえる。既出資料の中房の径が小さい型式に分類され、摩耗によるものか、そこに配される蓮子はほとんど確認できない。丸瓦との接合は、瓦当裏面に溝を設け、そこに丸瓦を貼り付けている。裏面中央部はやや盛り上がった状態に整えられ、この点で前者とは異なる。これら２点は飛鳥時代のもので、北側の調査で検出した北野廃寺瓦窯あるいは岩倉幡枝瓦窯で生産されたものである。

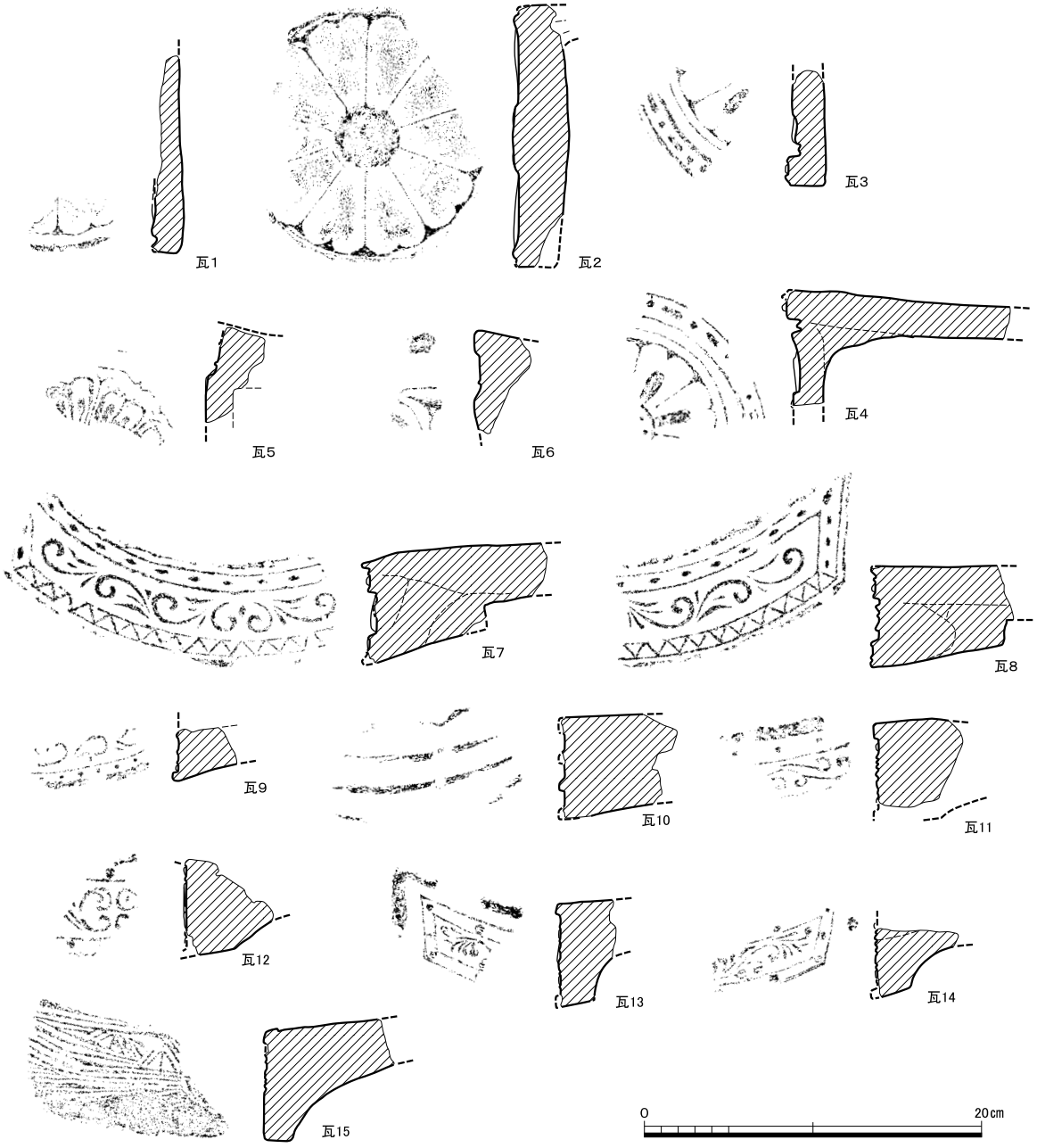


図14　軒瓦拓影及び実測図（１：４）

瓦３と瓦４は、谷110第２層以下から出土した。重圏文縁単弁八葉蓮華文（山田寺亜式）を表す。前記に続く白鳳時代のもので、岩倉古窯群の製品である。

瓦５は、谷110第１層から出土した。複弁八葉蓮華文を表す。圏線が正円とならず、稜を持つ特徴などから、東寺で確認される資料と共通し、軒平瓦の瓦13と瓦14と組み合う。時期は平安時代前期の９世紀前葉頃に位置づけられる。

瓦６は、溝５から出土した。複弁四弁蓮華文に復元され、裏面には一本作り製作技法が観察される。文様と製作技法より平安時代中期の９世紀後半から10世紀前葉にかけての時期とみられる。

軒平瓦（図14、図版20　瓦７～15）　７種類９点を確認した。

瓦７と瓦８は、谷110第２層以下から出土した。興福寺所用の6671型式[4)]を忠実に模した均整唐草文を表す。ただ、支葉の一単位がそれより一本多く、三本一組で表現される点が異なる。今回出土した中では大型で段顎である。時期は奈良時代の８世紀前葉である。北側で検出された北野廃寺瓦窯での生産が確認されている。

瓦９は、谷110第１層から出土した。平城宮式軒瓦6721型式系の均整唐草文を表す。北野廃寺瓦窯で生産された平安時代前期の製品である。

瓦10は、土坑54から出土した。重郭文を表す。難波宮所用瓦の流用品である。

瓦11は、整地層２から出土した。均整唐草文を表す。木村捷三郎氏が北野廃寺で採集された754と同文と考えられる[5)]。同氏によって、これと同笵とされる資料が平安宮大内裏でも採集され、安井西裏瓦窯跡でも同笵瓦が出土している[6)]。時期については、平安時代前期の９世紀初頭から中頃にかけての所産と考えられる。

瓦12は、土坑54から出土した。中心飾りに対向する「Ｃ」字形の文様を表現した均整唐草文を表す。胎土から西賀茂角社瓦窯産、意匠からＮＳ205Ａに分類される[7)]。

瓦13は土坑60、瓦14は溝５から出土した。均整唐草文を表し、段顎となる。中心飾りには、東寺で確認される資料にみられる「大伴」または「左寺」銘があったと

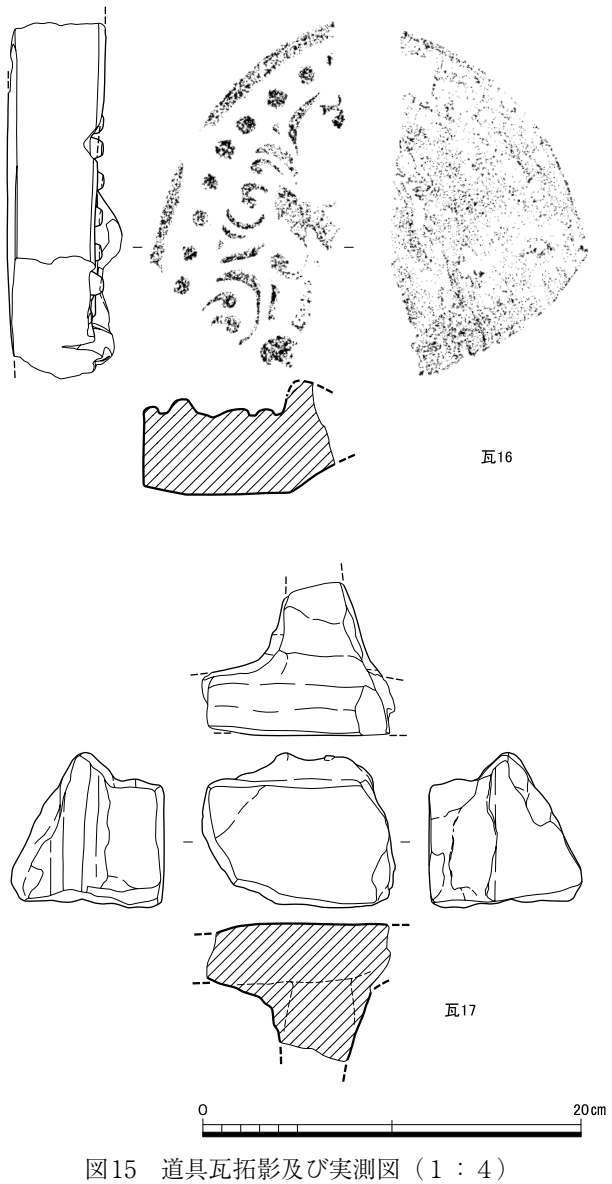


図15　道具瓦拓影及び実測図（１：４）

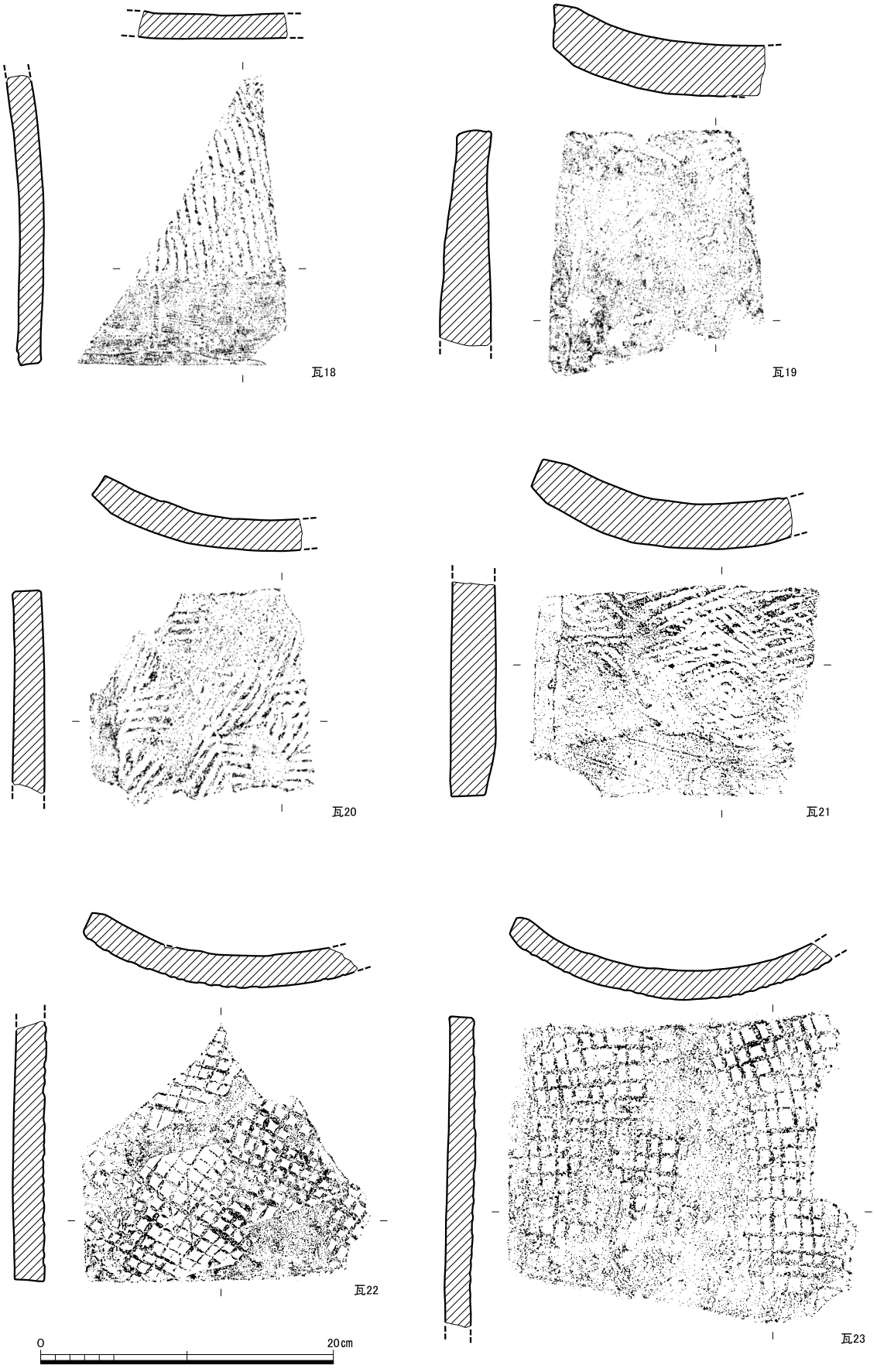


図16　平瓦拓影及び実測図（１：４）

みられ、軒丸瓦の瓦５と組み合う。この２点は異なる遺構から出土したが、出土遺構が重複関係にあることに加え、文様や胎土、色調、焼成が近似するため、同一個体である可能性がある。時期は平安時代前期の９世紀前葉頃である。

瓦15は、谷110第１層から出土した。通有の唐草文とは大きく異なり、数条の一単位とする直線を多方向に組み合わせて、幾何学的な文様を表す。左端は脇区を設けず、文様がそのまま断ち切られている。同様の資料は、南東側の調査区[8)]や、京内左京六条三坊五町[9)]でも出土している。時期は、瓦当形態から平安時代とみられるが特定し難い。

鬼板（図15、図版21　瓦16） 谷110第２層以下から出土した。左側上位の周縁と珠文、唐草文や鬼面の一部が遺存する。鬼面は剥離のため大部分を欠失するが、耳から頬にかけての一部を確認できる。裏面は周縁を大きく残して中央部を浅く刳り込んでいる。焼成は焼締陶器のように極めて緻密で、一部自然釉が付着する。類品は平安宮豊楽院などから出土している。

鴟尾（図15、図版21　瓦17） 整地層２から小破片となって出土した。詳細は不明だが、腹部から側面にかけての部位と考えられる。外面には平坦な部分が観察され、これが鰭部の逆段となる可能性もある。焼成はいわゆる生焼け状態で、表面は粉状となり摩耗が激しい。このため調整はほとんど観察できない。

平瓦（図16、図版21　瓦18～23） 谷110第２層以下から出土した。瓦18・20～23は、平瓦の凸面タタキが特徴的な５点である。瓦19は軒平瓦の瓦当部が欠失した平瓦部である。

調整技法から以下の三種に分類される。凸面に縄目タタキ、凹面に摸骨痕を伴う布目のもの（瓦18）。凸面に綾杉状タタキ、凹面に摸骨痕を伴う布目のもの（瓦20・21）。凸面に格子あるいは斜格子タタキ、凹面に模骨痕を伴う布目のもの（瓦22・23）。平瓦凸面の叩きの種類は、出土量的には、格子・斜格子、綾杉状、縄目の順となる。

（４）土製品（図版19、付表３）

漆容器（土１・２） 整地層３から２点出土した。ともに須恵器で、瓶子のような小型の壷の体部から肩部にかけての破片である。色調や焼成などが共通するため同一個体と考えられる。内面には黒色の顔料が付着し、うち、土２には光沢をもつ樹脂状の薄膜が観察されることから、これを漆とみなし、その容器として報告する。

製塩土器（土３） 整地層３から出土した。長辺約6.5㎝、短辺4.5㎝弱となり、上位に口縁端部が遺存する。表面は被熱により赤変し、器壁は１㎝前後となる。胎土は粗く、直径0.5㎝以下の長石や石英を多く含む。時期は既往の例から平安時代前期、９世紀前半頃までと考えられる。

（５）石製品（図版19、付表３）

砥石（石１・２） ２点出土した。双方とも研面の一部を残し、流理に平行する状態で層状に剥離している。石１は第１面の溝５から出土した。大きさは長辺約5.7㎝、短辺約３㎝、厚さは約0.8㎝である。中央部に長辺に平行した状態で線状痕が観察される。材質は流理状組織が発達した硬質の頁岩と思われる。硬度と粒径より、中砥石から仕上げ用砥石として使用されたと考えられる。石２は、調査区第２面南西隅に位置する土坑64から出土した。大きさは長辺約５㎝、短辺４㎝強、厚さは約0.5㎝である。遺存する砥面は平坦で滑沢を持つ。材質はやや軟質の珪質頁岩、粒度の細かさから仕上げ用砥石とみられる。

石鍋（石３） 整地層１から出土した。羽釜と同様の形をなす滑石製品で、鍔の部分を除いて他の大部分を失い、鍔から下位には煤の付着が観察される。体部上半から口縁部にかけての内傾の度合いや、鍔の短く張り出す形状などから、木戸分類のⅢａ類[10)]に相当し、平安時代後期の12世紀初頭頃に位置づけられる。

（６）金属製品（図版19、付表３）

銅滴（金1～３） ３点出土した。いずれも塊状となった緑青の状態で、重量は金１が1.54ｇ、金２が1.33ｇ、金３が0.83ｇとなる。金１は整地層１から出土し、表面には鬆が観察される。金２と金３は谷110第１層から出土し、双方とも破断面を持つが、銅の金属光沢は観察できない。

これらのうち、整地層１出土の金１は、共伴遺物から近代まで下がる可能性を否定できないが、後掲の２点は、平安時代前期の遺物とともに出土しているため、北野廃寺の金属器生産に伴うものである可能性がある[11)]。

鉄滓（金４・５） 谷110最下層に堆積する砂礫層から２点が出土した。そのうち金４は、重さ140.44ｇ、表面全体が溶融し流れ出したような様相を示し、ごくわずかではあるが磁石に反応する。金５は、重さ426.00ｇで、表面には鬆状の小孔と、溶融する部分が混在し、わずかながら磁石に反応する。断面は、粒径１㎝前後の礫を取り込んで固化した状態となり、多くの気泡が観察される。これらは、南東側の調査で検出された製鉄関連遺構との関係をうかがわす資料である。

（７）動物遺存体

土坑101から出土したイヌの骨格は、左側面を上にした状態で土坑埋葬時の位置を概ね保ち検出した。ほぼ全身の骨格部位が遺存するものの、土圧と劣化によって頭蓋骨の前頭突起付近から上の前頭・後頭骨にかけては細片となって形状を留めず、四肢骨の骨端部は潰れ、尾椎や指骨も確認できない。性別は陰茎骨が確認できず、メスの可能性はあるが、寛骨や頭骨も潰れているため即断はできない。また、体高についても計測可能な完存部位はないが、比較的保存状態に恵まれた左橈骨の残存長149.3㎜を測り、中大級に分類される体高46～50㎝と推定される[12)]。

（8）赤色顔料（図17～20、表４・５）

谷110採取の赤色顔料について蛍光X線分析を行った[13)]。分析により天然辰砂であると判明した。以下に測定条件、試料写真、分析結果を提示する。

表４　測定条件

測定装置	EA1000VX
測定時間(秒)	120
有効時間(秒)	94
コリメータ	φ1.0mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	1000
フィルタ	OFF
マイラー	OFF
コメント	北野廃寺 赤色顔料

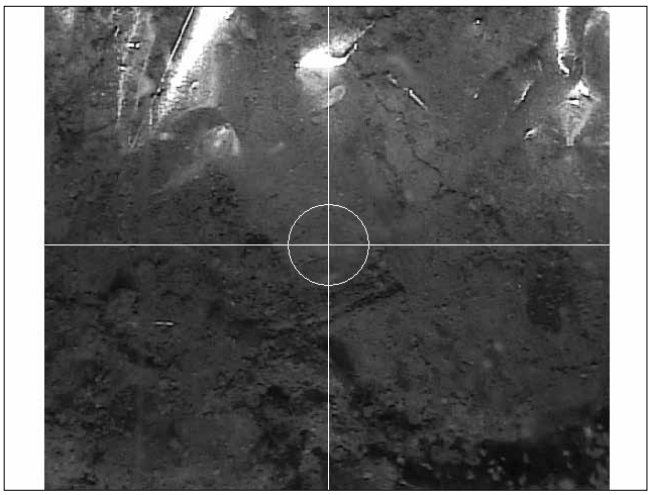


図17　試料像　　視野:[X Y] 7.92　5.94 (㎜)

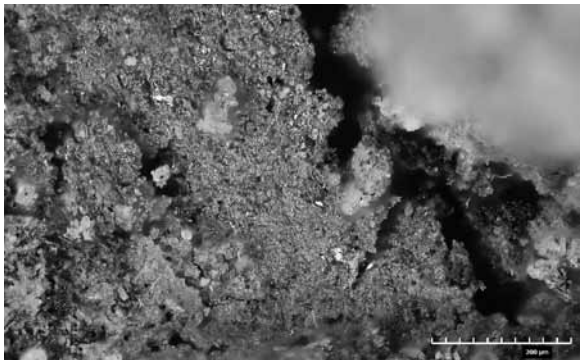


図18　拡大画像１

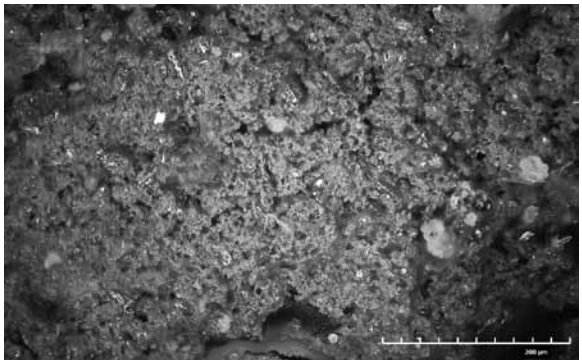


図19　拡大画像２

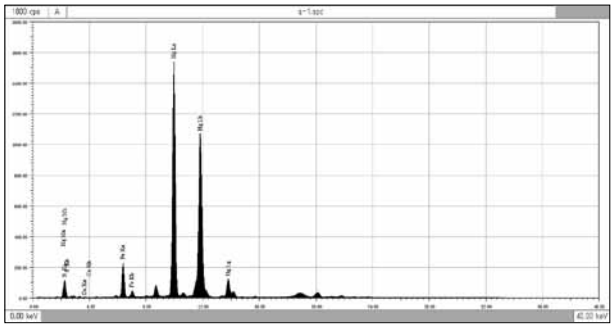


図20　分析結果スペクトル

表５　分析結果

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
16	S	硫黄	Kα	2241.672	2.15- 2.46
20	Ca	カルシウム	Kα	149.509	3.52- 3.85
26	Fe	鉄	Kα	4489.954	6.21- 6.59
80	Hg	水銀	Lα	34849.298	9.77-10.19

註

1）『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報　平成４年度』 京都市文化観光局　1993年

2）「Ｘ　栗栖野瓦窯跡（90RH７）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成３年度』 京都市文化観光局　1992年

上村和直「平安京周辺の施釉陶器生産」『古代の土器研究－律令期的土器様式の西・東』３　施釉陶器－古代の土器研究会　1994年

3）「１．篠・マル１号窯跡」『京都府遺跡調査概報　第74冊』 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1997年

4）『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』 奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会　1995年

5）『木村捷三郎収集瓦図録』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年　図版46　北山城の遺跡（６）754

6）「12　平安京右京二条四坊・安井西裏瓦窯跡」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1999年　図74－２

7）『平安宮跡研究調査報告第４輯　西賀茂瓦窯跡』 財團法人古代學協會　1978年

8）『北野廃寺発掘調査報告書」 関西文化財調査会　2010年

9）『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005－８　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2005年

10）木戸稚寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究』IX　日本中世土器研究会　1993年

11）『日本紀略』弘仁11年（820）正月24日条 「常住寺で四天王像を鋳造」との関連性を示唆する可能性を持つ。

12）体高推定式は、西中川駿・福島晶・谷山敦・池田省吾・土岐学司・小山田和央・松元光春「イヌの計測値から骨長ならびに体高の推定法」『動物考古学』第25号　動物考古学研究会　2008年、大きさの分類は、長谷部言人「犬骨」『吉胡貝塚』 文化庁　1952年を参照した。

13）蛍光Ｘ線分析及び拡大画像撮影は、龍谷大学文学部の北野信彦氏・山田卓司氏に依頼した。

参考文献

『長岡京古瓦聚成』向日市文化財調査報告書 第20集　向日市教育委員会　1987年

日本中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社　1995年

『大宰府条坊跡』ＸＶ－陶磁器分類編－　大宰府市教育委員会　2000年

赤松佳奈「京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景（２－１）－白磁分類への問題提起－『京都市文化財保護課研究紀要』第４号　京都市文化財保護課　2021年

日本中世土器研究会編『新版　概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社　2022年

『平安のやきもの－その姿、うつろいゆく』特別展図録　愛知県陶磁美術館　2024年

5．まとめ

今回の調査は、これまで明らかにされていた北野廃寺に関する知見を補強するとともに、新たな情報を付け加えたことが成果となる。

遺構については、これまで知られていた調査地北西約80ｍで検出された掘立柱建物群以外に、その南にも平安時代前期の掘立柱建物群が展開している状況を確認したことがあげられる。

これらの掘立柱建物群は、既往調査で確認されている推定寺域内の谷地形に構築された瓦窯群に近接しており、造瓦に携わった工人集団との関係も想定できる。また、今回の調査では、瓦窯が構築された谷の延長部である谷110から、焼き損じの瓦以外に銅滴や鉄滓も出土した。以前の調査での白炭窯や、東側隣接地で検出された製鉄関連遺構と、今回出土した銅や鉄に関連する遺物とを関連づけるならば、造瓦集団以外に金属加工に従事する集団の存在を想定することが可能となる。さらに、漆容器とされた須恵器の壷や辰砂の出土は、前記二者以外の役務を担う別集団の存在も推定させる。

これらから、工房域内には各分野の専門的技能を持つ職能集団群が存在し、それらが複合的に関わりながら、総体として寺院造営に携わっていた状況を想定し得る。この状況は、位置と環境で述べた弘仁11年（820）に記された四天王銅像鋳造記事に関連する考古学的事象としても興味深い。

また、谷110の埋土上位の焼土層検出も重要である。史料からは、付近に存在したと考えられる常住寺で天安２年（858）と、天慶８年（884）に火災が発生したと記される。今後、周辺の調査や研究の進展に伴い、いずれの罹災によるものかの検討に資する材料となることを期待する。

なお、今回の掘立柱建物群と、平安京北辺とは40ｍしか離れていない。京域と極めて近接する位置に、このような機能を持つ施設群を配することが許されたのであろうかが課題として残る。

遺物については、奈良三彩の小型壷、平安時代前期の瓦類、江戸時代の地鎮遺構に用いられた土師器の小皿に記される墨書が特徴的である。奈良三彩は、宮域や寺院、祭祀にかかわる例が多い遺物の一つである。器形に注目した場合、今回の例は、既知の諸例とは異なる。類型は須恵器の長頸壷や双耳壷などに求められる。栗栖野瓦窯群13号窯や、21号窯より二彩陶器片が出土していることを述べたが、今回の例も時期が新しくなる可能性を指摘しておきたい。

瓦類のうち、鴟尾と鬼板はともに寺院を想起させる象徴的な遺物である。鬼板は豊楽院出土例と酷似するため、平安時代前期の北野廃寺造営に際し、官が関与した状況が推察される。

これらの新出資料は、実態が必ずしも明確ではない北野廃寺や、平安京造営当時における北縁部の状況を知るうえで新たな知見となった。

江戸時代後期の土器埋納遺構70に用いられた土師器の小皿２点に記された文字のうち、「中央黄帝」は四神の長である黄帝、「龍王」は水神の八大龍王、「安鎮」は安鎮法に拠る家屋や屋敷地を鎮めるための修法、そして、「三元三行三妙加持」は神道の五形祓に用いられる祝詞の用語である。地鎮は、その土地区画や、建築が計画された家屋の中心で執り行われる。このため、埋納遺構70が掘り込まれたその場所が、すなわちその位置そのものに相当することを指し表している。

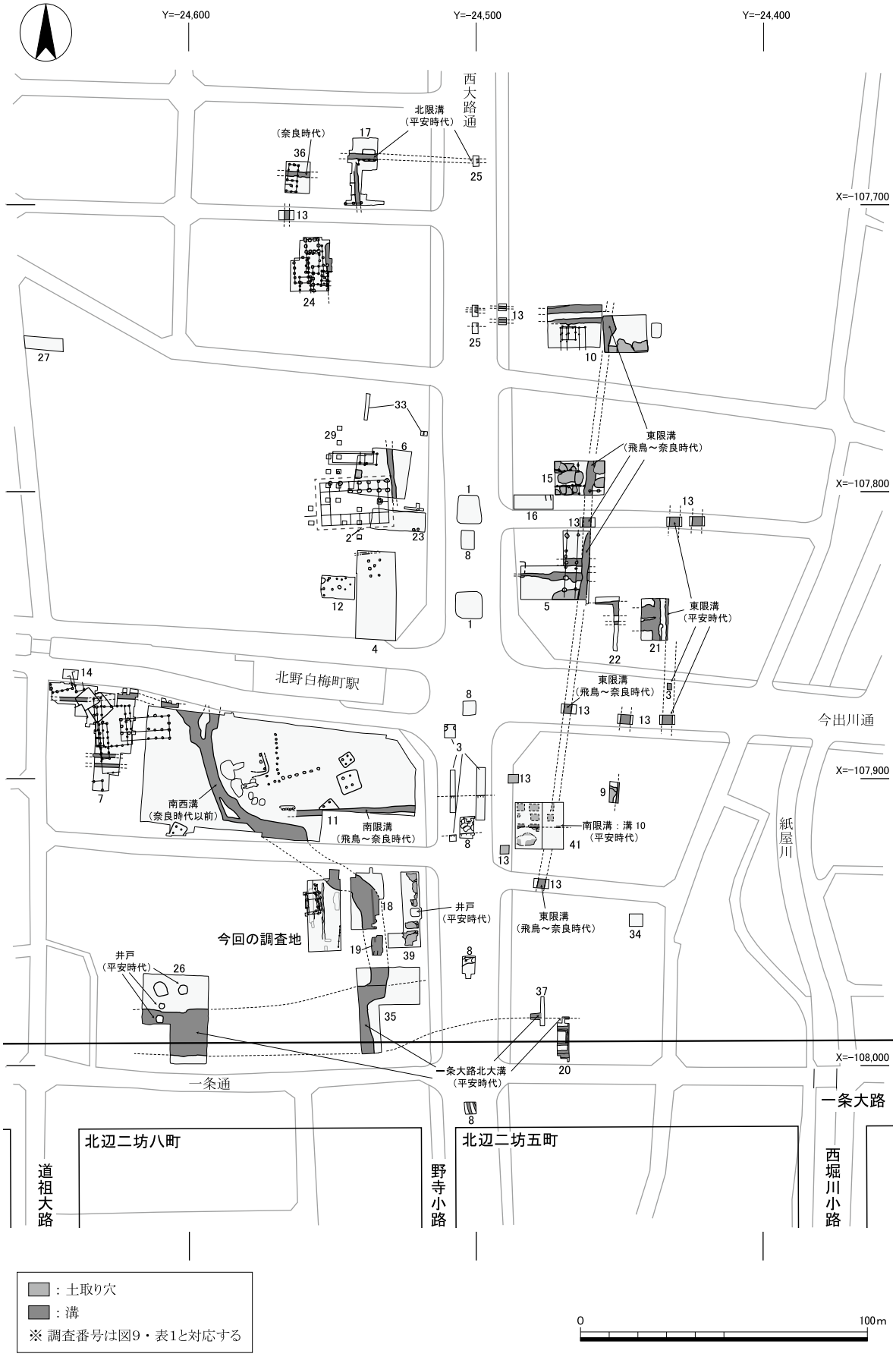


図21　飛鳥時代から平安時代の遺構分布図（１：2,000）

付表１　土器類観察表

番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			色調	胎土	備考
				口径	器高	底径			
1	土師器	皿	埋納遺構70	8.3	1.2		7.5YR8/3 浅黄橙色	微細な砂粒少量	上蓋、墨書あり
2	土師器	皿	埋納遺構70	8.6	1.3		10YR8/3 浅黄橙色	石英・長石	下皿、墨書あり
3	土師器	皿	整地層3	15.3	(2.4)		7.5Y8/2 灰白色	石英・長石・チャート	
4	土師器	皿	整地層3	16.0	2.7		2.5Y8/1 灰白色	チャート・白雲母	口縁端部黒変
5	須恵器	杯蓋	整地層3	14.7	(0.8)		N7/0 灰白色	石英・長石	
6	緑釉陶器	椀	整地層3	—	(1.8)	6.8	7.7YR8/4 浅黄橙色	長石・赤色粒	釉:暗緑色
7	灰釉陶器	椀	整地層3	14.9	5.3	7.1	7.5Y8/1 灰白色	長石・石英・胎土粒	猿投窯産
8	輸入白磁	椀	土坑54	—	(2.8)	7.0	5Y8/1 灰白色	微細な黒色粒少量	華南沿岸諸窯産
9	土師器	皿	柱穴58	13.1	(1.5)		7.5Y7/4 にぶい橙色	微細な赤色粒・白雲母	
10	灰釉陶器	壷	柱穴132(柵3)	—	(2.4)	9.0	2.5Y8/1 灰白色	精良、ほとんど砂粒含まず	
11	灰釉陶器	壷	柱穴123(建物2)	—	(4.7)	9.5	2.5Y7/2 灰黄色	石英・長石	静止糸切り
12	緑釉陶器	椀	溝80	—	(1.4)	7.4	7.5Y8/2 灰白色	長石・チャート	軟質
13	土師器	甕	溝80	18.6	(6.2)		10YR5/3 にぶい黄橙色	石英・長石・チャート	
14	須恵器	壷	溝80	10.4	(4.8)	—	N5/0 灰色	石英・長石・チャート	粗雑なつくり
15	須恵器	壷	溝80	12.4	(4.9)	—	N5/0 灰色	石英・黒色粒	
16	灰釉陶器	壷	溝80	—	(9.8)	7.6	10YR6/3 にぶい黄橙色	長石・チャート・黒色粒	生焼け、静止糸切り、猿投窯産
17	灰釉陶器	壷	溝80	—	(5.5)	11.6	10YR7/2 にぶい黄橙色	石英・黒色粒	猿投窯産
18	須恵器	瓶子	谷110 第1層	4.0	(2.7)	—	5B5/1 青灰色	精良、ほとんど砂粒含まず	回転糸切り
19	須恵器	瓶子	谷110 第1層	3.8	(2.8)	—	7.5Y8/1 灰白色	微細な黒色粒少量	
20	須恵器	瓶子	谷110 第1層	4.1	(3.9)	—	2.5Y7/1 灰白色	精良、ほとんど砂粒含まず	
21	須恵器	瓶子	谷110 第1層	—	(3.0)	4.1	N7/0 灰白色	精良、ほとんど砂粒含まず	回転糸切り、自然釉付着
22	須恵器	瓶子	谷110 第1層	—	(4.1)	3.7	7.5Y6/1 灰色	精良、ほとんど砂粒含まず	回転糸切り
23	須恵器	瓶子	谷110 第1層	—	(4.0)	4.2	N6/1 灰色	微細な黒色粒少量	回転糸切り
24	須恵器	瓶子	谷110 第1層	—	(3.1)	4.2	N6/1 灰色	精良、ほとんど砂粒含まず	回転糸切り
25	須恵器	瓶子	谷110 第1層	—	(4.4)	4.5	10BG5/1 青灰色	長石少量	回転糸切り
26	灰釉陶器	壷	谷110 第1層	—	(8.5)	8.2	10YR5/2 灰黄褐色	長石・チャート・黒色粒	回転糸切り、内面付着物、尾張産
27	須恵器	鉢	谷110 第1層	29.8	(6.8)	—	N6/0 灰色	長石・チャート	
28	緑釉陶器	椀	谷110 第1層	—	(1.4)	7.0	10YR8/3 浅黄橙色	長石・チャート	塗掛け、釉:7.5Y7/2灰白色
29	土師器	皿	谷110 第1層	14.3	(1.4)		10YR8/3 浅黄橙色	微細な赤色粒少量	
30	緑釉陶器	椀	谷110 第2層以下	—	(2.4)	5.9	10YR8/2 灰白色	長石	蛇ノ目高台、釉:2.5Y7/2 灰黄色

※（ ）は残存値

番号	種類	器形	出土遺構	法量(cm)			色調	胎土	備考
				口径	器高	底径			
31	緑釉陶器	鉢	谷110 第2層以下	—	(3.3)	8.8	2.5Y8/1 灰白色	石英・長石・チャート	釉:明緑色、軟質
32	三彩陶器	壷	谷110 第2層以下	—	(9.0)	5.0	10YR8/4 浅黄橙色	長石少量(珪砂質)	色調は素地の色
33	須恵器	瓶子	谷110 第2層以下	3.7	(2.7)	—	N5/0 灰色	石英・長石・黒色粒	
34	須恵器	瓶子	谷110 第2層以下	—	(3.5)	3.9	N5/0 灰色	長石・黒色粒	回転糸切り
35	須恵器	瓶子	谷110 第2層以下	—	(4.5)	4.3	2.5Y6/1 黄灰色	長石・黒色粒	回転糸切り
36	須恵器	瓶子	谷110 第2層以下	—	(7.8)	3.0	N6/0 灰色	石英・長石	
37	須恵器	杯身	谷110 第2層以下	12.8	3.6	8.7	7.5GY4/1 暗緑灰色	石英・長石少量	
38	須恵器	杯身	谷110 第2層以下	—	(2.7)	9.0	N6/0 灰色	石英・長石・黒色粒	
39	須恵器	杯身	谷110 第2層以下	12.6	5.3	8.9	5Y6/1 灰色	長石・花崗岩片多量	
40	須恵器	杯身	谷110 第2層以下	15.1	5.7	10.3	2.5Y7/1 灰白色	精良、ほとんど砂粒含まず	
41	須恵器	杯蓋	谷110 第2層以下	15.8	(1.6)		2.5Y7/1 灰白色	石英・長石・チャート	
42	須恵器	杯蓋	谷110 第2層以下	17.5	(2.0)		N7/0 灰白色	石英・チャート	
43	須恵器	甕	谷110 第2層以下	17.6	(5.3)		N7/0 灰色	長石・チャート・黒色粒	
44	須恵器	鉢	谷110 第2層以下	22.8	5.0	—	2.5Y7/1 灰白色	長石・チャート	
45	須恵器	壷蓋	谷110 第2層以下	14.0	(2.1)		N6/0 灰色	精良、ほとんど砂粒含まず	
46	須恵器	壷	谷110 第2層以下	7.8	(7.5)	—	N6/0 灰色	長石・チャート	
47	須恵器	壷	谷110 第2層以下	—	(6.0)	—	N5/0 灰色	石英・長石	注口剥離痕あり
48	須恵器	壷	谷110 第2層以下	11.8	(8.0)	—	N5/0 灰色	石英・長石	双耳剥離痕あり
49	須恵器	壷	谷110 第2層以下	—	(2.3)	8.0	N6/0 灰色	石英・長石	回転糸切り
50	須恵器	壷or平瓶	谷110 第2層以下	—	(5.3)	9.8	N5/0 灰色	石英・長石・チャート	回転糸切り
51	須恵器	壷	谷110 第2層以下	—	(4.0)	8.6	N6/0 灰色	石英・長石	
52	須恵器	平瓶	谷110 第2層以下	—	(3.9)	11.3	N/0 灰白色	石英・黒色粒	回転糸切り
53	須恵器	壷	谷110 第2層以下	—	(6.2)	10.9	N7/0 灰白色	石英・長石・チャート	
54	土師器	皿	谷110 第2層以下	14.8	(2.3)		7.5YR7/4 にぶい橙色	石英・長石・チャート	
55	土師器	皿	谷110 第2層以下	14.8	(2.4)		7.5YR8/6 浅黄橙色	石英・長石・赤色粒	
56	土師器	皿	谷110 第2層以下	17.6	(2.1)		7.5YR7/6 橙色	石英・長石・チャート	
57	土師器	皿	谷110 第2層以下	18.4	(2.3)		5YR7/6 橙色	石英・長石・チャート	
58	土師器	甕	谷110 第2層以下	17.0	(5.2)		10YR7/3 にぶい黄橙色	石英・チャート・雲母	
59	土師器	甕	谷110 第2層以下	23.6	(8.3)		7.5YR6/4 にぶい橙色	石英・長石・チャート	
60	土師器	甕	谷110 第2層以下	26.8	(6.5)		7.5YR8/6 浅黄橙色	石英・長石・赤色粒	

※( )は残存値

付表２　瓦類観察表

番号	種類	文様	出土遺構	法量(cm)			色調	胎土	備考
				縦	横	厚さ			
瓦1	軒丸瓦	素弁十葉蓮華文	谷110 第2層以下	(11.6)	(7.1)	1.8	7.5Y5/3 にぶい褐色	石英・長石・チャート	
瓦2	軒丸瓦	素弁十葉蓮華文	谷110 第2層以下	15.8	(14.1)	3.3	2.5Y8/1 灰白色	石英・長石・チャート	
瓦3	軒丸瓦	重圏文縁単弁八葉蓮華文	谷110 第2層以下	(6.9)	(6.4)	2.2	10YR8/3 浅黄橙色	石英・長石・チャート・礫	山田寺亜式
瓦4	軒丸瓦	重圏文縁単弁八葉蓮華文	谷110 第2層以下	(6.9)	(6.4)	2.3	N7/0 灰白色	石英・長石・チャート・礫	山田寺亜式
瓦5	軒丸瓦	複弁八葉蓮華文	谷110 第1層	(6.2)	(9.9)	―	N3/0 暗灰色	石英・長石・チャート	
瓦6	軒丸瓦	複弁四葉蓮華文	溝5	(6.3)	(7.1)	―	N3/0 暗灰色	石英・長石・チャート	
瓦7	軒平瓦	均整唐草文	谷110 第2層以下	6.1	(15.1)	―	N3/0 暗灰色	石英・長石・チャート・礫	
瓦8	軒平瓦	均整唐草文	谷110 第2層以下	(6.1)	(21.7)	―	N3/0 暗灰色	石英・長石・チャート・礫	
瓦9	軒平瓦	均整唐草文	谷110 第1層	(3.3)	(7.9)	―	10YR8/1 灰白色	石英・長石・チャート・礫	
瓦10	軒平瓦	重郭文	土坑54	6.0	(11.7)	―	N6/0 灰色	石英・長石・チャート	
瓦11	軒平瓦	均整唐草文	整地層2	(6.3)	(9.6)	―	N3/0 暗灰色	石英・長石・チャート	
瓦12	軒平瓦	均整唐草文	土坑54	(6.2)	(9.3)	―	7.5YR7/6 橙色	石英・長石・チャート・礫	被熱痕跡
瓦13	軒平瓦	均整唐草文	土坑60	6.0	(8.0)	―	5Y7/1 灰白色	石英・長石・チャート	
瓦14	軒平瓦	均整唐草文	溝5	(4.4)	(9.4)	―	N7/0 灰白色	石英・長石・チャート	
瓦15	軒平瓦	(唐草文？)	谷110 第1層	6.6	(13.0)	―	2.5Y6/1 黄灰色	石英・長石・チャート	幾何学的模様
瓦16	鬼板	鬼面文	谷110 第2層以下	(18.7)	(9.6)	(5.7)	N7/0 灰白色	石英・長石・チャート・礫	豊楽院と同文
瓦17	鴟尾		整地層2	(7.6)	(9.7)	(8.2)	10YR7/1 灰白色	石英・長石・チャート	腹部から側面か？
瓦18	平瓦	平行状タタキ	谷110 第2層以下	(14.2)	(19.5)	1.2	N5/0 灰色	石英・長石・チャート	凹面布目+摸骨痕
瓦19	平瓦	ナデ	谷110 第2層以下	(14.9)	(17.3)	3.7	N4/0 灰色	石英・長石・チャート・礫	凹面布目、軒平瓦
瓦20	平瓦	綾杉状タタキ	谷110 第2層以下	(14.9)	(14.9)	2.1	7.5Y7/4 にぶい橙色	石英・長石・チャート	凹面布目+摸骨痕
瓦21	平瓦	綾杉状タタキ	谷110 第2層以下	(14.5)	(17.7)	3.0	N5/0 灰色	石英・長石・チャート	凹面布目+摸骨痕
瓦22	平瓦	格子タタキ	谷110 第2層以下	(17.5)	(18.8)	2.2	10YR8/3 浅黄橙色	石英・長石・チャート	凹面布目+摸骨痕
瓦23	平瓦	格子タタキ	谷110 第2層以下	(21.0)	(22.0)	2.0	7.5Y7/4 にぶい橙色	石英・長石・チャート・礫	凹面布目+摸骨痕

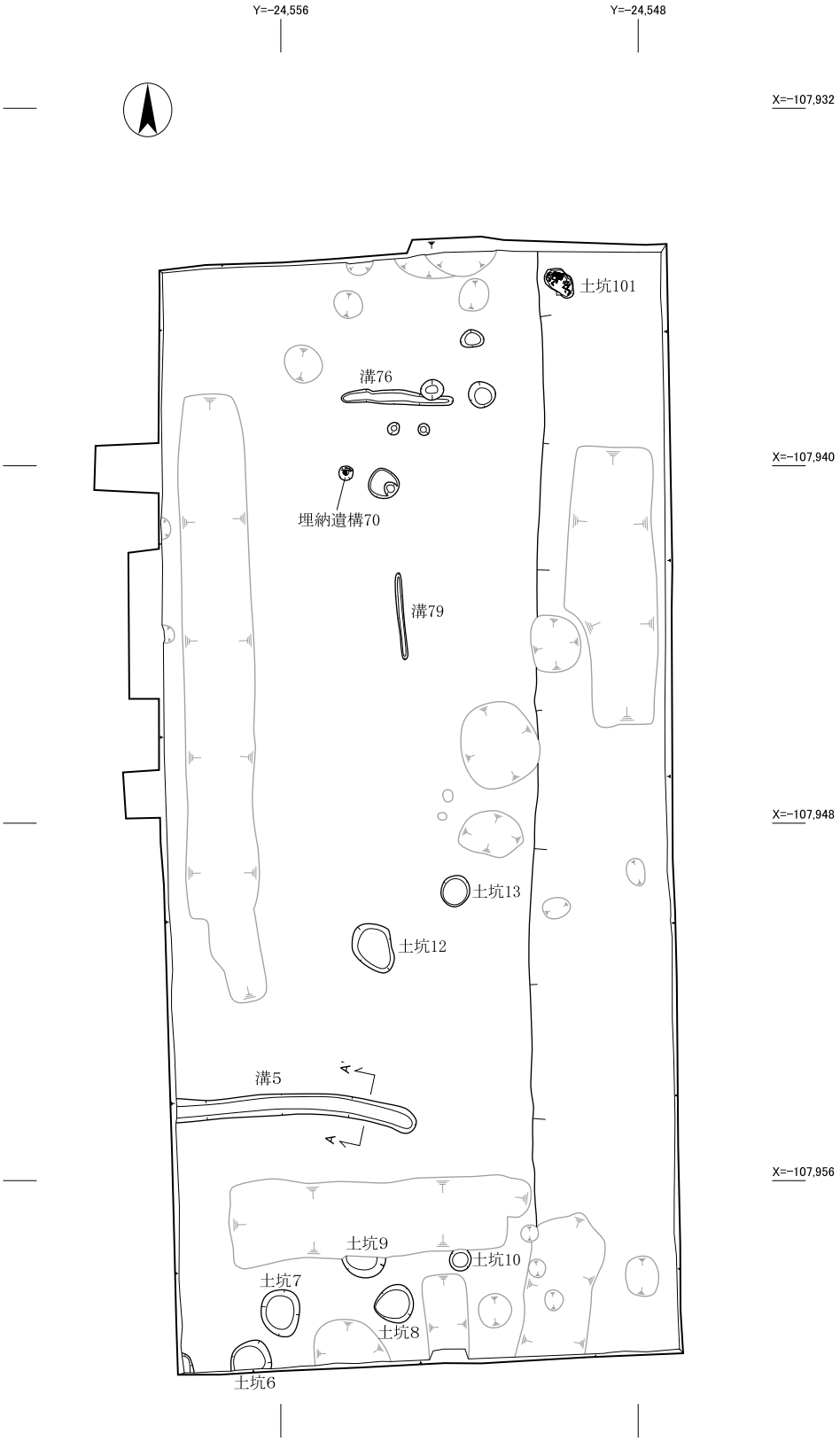
※（ ）は残存値

付表３　土製品・石製品・金属製品観察表

番号	種類	出土遺構	法量(cm)			重量(g)	色調	胎土	備考
			縦	横	厚さ				
土1	漆容器	整地層3	(3.7)	(4.1)	0.6		2.5Y7/2 灰黄色	精良、ほとんど砂粒含まず	内面漆付着
土2	漆容器	整地層3	(4.5)	(4.1)	0.6		2.5Y7/2 灰黄色	精良、ほとんど砂粒含まず	内面漆付着
土3	製塩土器	整地層3	(6.3)	(5.1)	1.1		5YR5/8 明赤褐色	石英・長石・花崗岩礫	
石1	砥石	溝5	(3.0)	(5.7)	(0.8)		7.5GY4/1 暗緑灰色		石材:頁岩
石2	砥石	土坑64	(4.0)	(5.0)	(0.5)		2.5Y8/6 黄色		石材:珪質頁岩
石3	石鍋	整地層1	(3.6)	(7.0)	1.7		2.5Y7/1 灰白色		石材:滑石、 外面煤付着
金1	銅滴	整地層1	1.0	1.3	0.7	1.54	緑青色		表面に鬆あり
金2	銅滴	谷110 第1層	1.1	1.4	1.0	1.33	緑青色		
金3	銅滴	谷110 第1層	1.2	1.5	0.8	0.83	緑青色		
金4	鉄滓	谷110 最下層	5.1	7.8	3.4	140.44	2.5Y3/1 黒褐色		銑
金5	鉄滓	谷110 最下層	(7.2)	(9.3)	(5.4)	426.00	5Y3/1 オリーブ黒色		ノロ

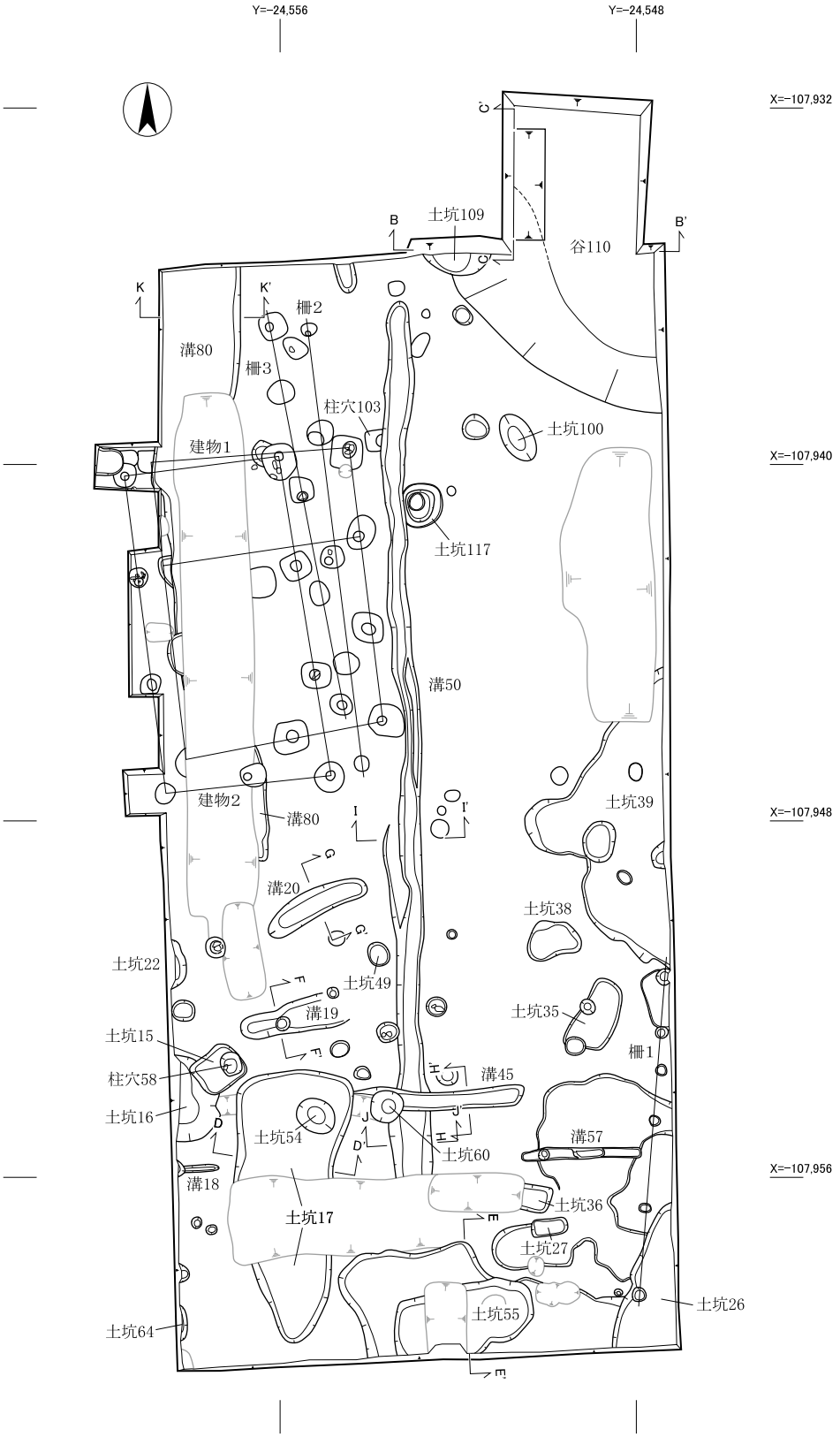
※（ ）は残存値

図　　版



※ A-A'は図版5に対応する。

第1面平面図（1：150）



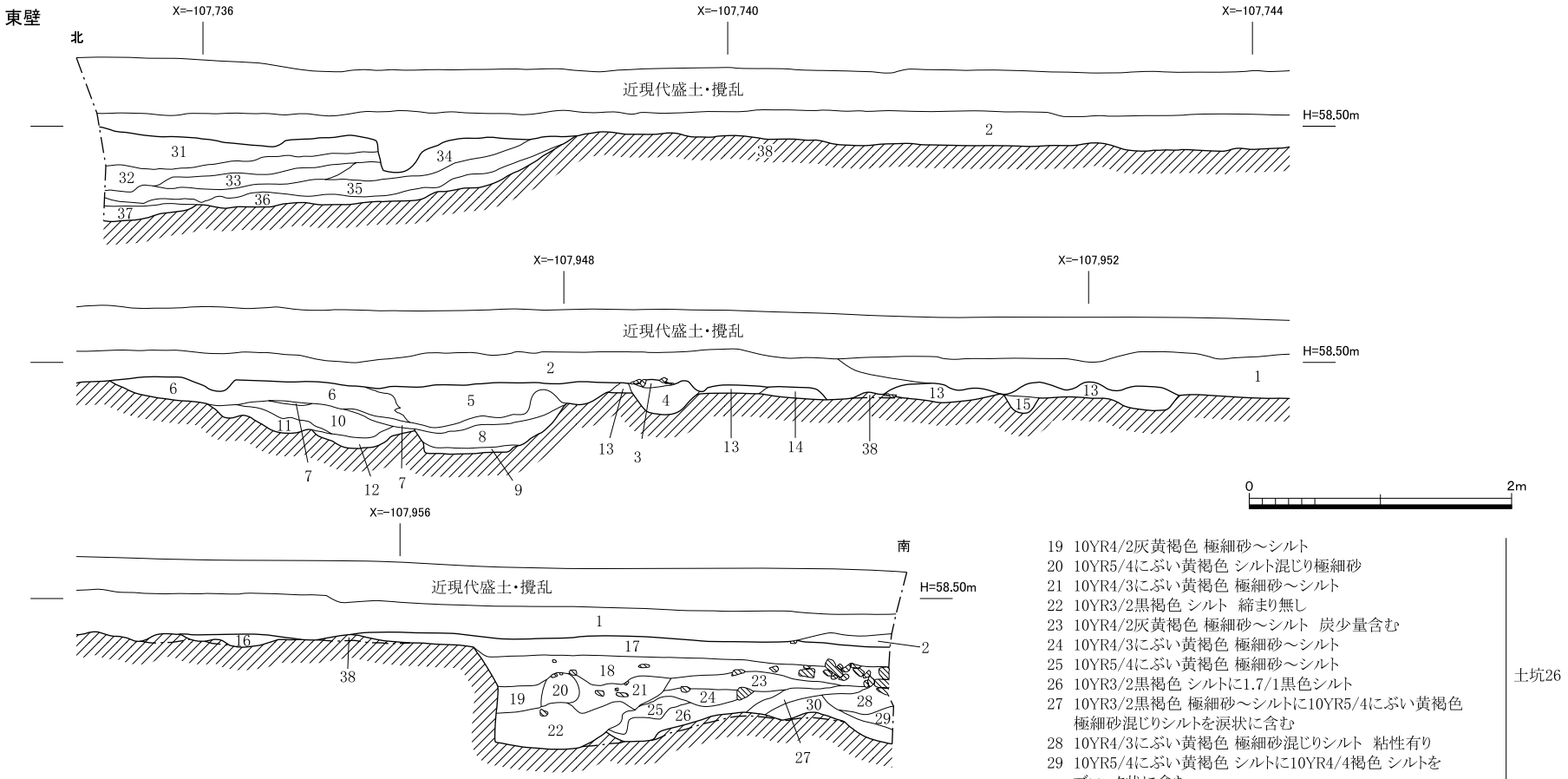
※ B-B'・C-C'は図版6、D-D'・E-E'は図版7、F-F'～K-K'は図版8に対応する。

0　10m

第２面平面図（１：150）

図版3　遺構

調査区東壁断面図（1：50）

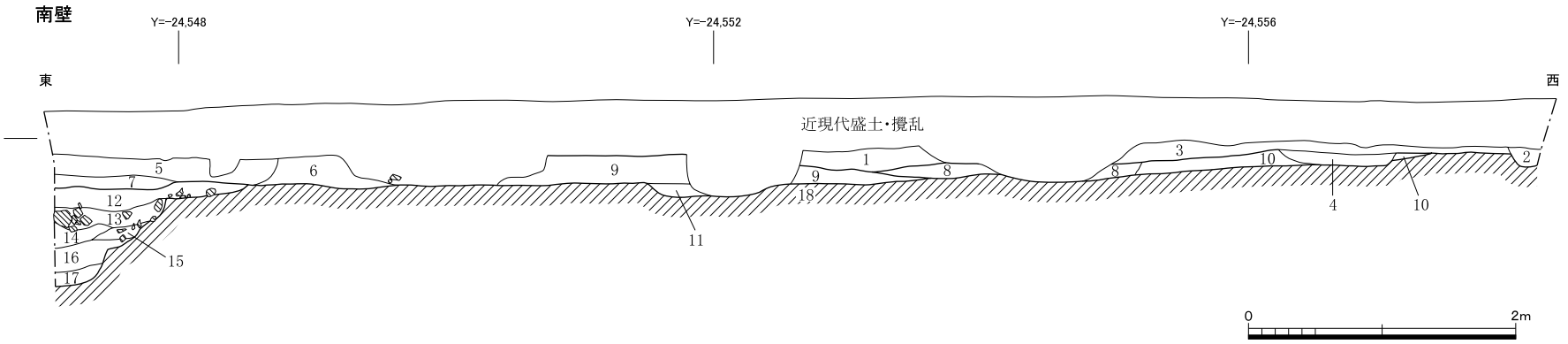


1　10YR3/2黒褐色 小礫混じり 極細砂～シルト(整地層1)
2　10YR2/2黒褐色 極細砂～シルト　炭含む(整地層2)
3　10YR2/2黒褐色 極細砂混じりシルト
4　10YR3/3暗褐色 中礫混じり極細砂
5　10YR2/1黒色 極細砂混じりシルトに10YR5/6黄褐色細砂混じり極細砂を粒状に少量含む
6　10YR2/1黒色 極細砂混じりシルト　締まり悪い
7　10YR5/6黄褐色 細砂混じりシルトに10YR2/1黒色極細砂混じりシルトをブロック状に含む
8　10YR2/1黒色 極細砂混じりシルトに10YR5/6黄褐色細砂混じりシルトを粒状にわずかに含む　締まり悪い
　→ 土坑39

9　10YR4/3にぶい黄褐色 粘土混じりシルトに10YR5/6黄褐色極細砂混じりシルトをラミナ状に夾雑する　φ3cm大の礫含む
10　10YR1.7/1黒色 極細砂混じりシルト　締まり悪い
11　10YR4/4褐色 極細砂混じりシルト　炭化物・焼土少量含む
12　10YR3/2黒褐色 細砂混じり極細砂
　→ 土坑39
13　10YR2/2黒褐色 シルト混じり極細砂
14　10YR4/4褐色 シルト混じり極細砂
15　10YR3/2黒褐色 礫混じり 中砂～シルト(柵1 柱穴33)
16　10YR2/2黒褐色 極細砂～シルト
17　10YR3/2黒褐色 極細砂～シルト　小礫含む
18　10YR3/3暗褐色 極細砂～シルト　中礫多量含む
　→ 土坑26

19　10YR4/2灰黄褐色 極細砂～シルト
20　10YR5/4にぶい黄褐色 シルト混じり極細砂
21　10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂～シルト
22　10YR3/2黒褐色 シルト　締まり無し
23　10YR4/2灰黄褐色 極細砂～シルト　炭少量含む
24　10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂～シルト
25　10YR5/4にぶい黄褐色 極細砂～シルト
26　10YR3/2黒褐色 シルトに1.7/1黒色シルト
27　10YR3/2黒褐色 極細砂～シルトに10YR5/4にぶい黄褐色極細砂混じりシルトを涙状に含む
28　10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト　粘性有り
29　10YR5/4にぶい黄褐色 シルトに10YR4/4褐色 シルトをブロック状に含む
30　10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト　粘性有り
　→ 土坑26
31　10YR2/2黒褐色 極粗砂混じり 極細砂～シルト　φ3～10cm大の礫・瓦多量含む　※鬼板出土層準
32　10YR2/1黒色 極細砂～シルト　φ5cm大の礫少量含む
33　10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト　φ3cm前後の礫少量含む
34　10YR3/4暗褐色 極細砂混じりシルト　炭化物若干含む
35　10YR3/2黒褐色 礫混じり 極粗砂～粗砂　φ5cm大の礫多量含む
36　10YR1.7/1黒色 極細砂混じりシルト
37　10YR4/3にぶい黄褐色 粘土混じりシルト　締まり悪い
　→ 谷110
38　10YR5/8黄褐色シルト　礫含む(基盤層)

調査区南壁断面図（1：50）

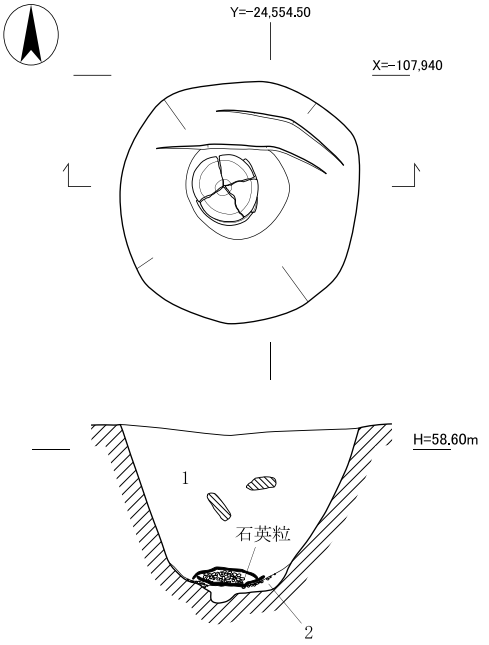


1　10YR3/3暗褐色 細砂～シルト　φ0.2～2㎝の礫少量含む
2　10YR3/2黒褐色 細砂～シルト　土師器片少量混じる　φ0.2～4㎝の礫少量含む
3　2.5Y3/3暗オリーブ褐色 細砂～極細砂　φ0.5～3㎝の礫多量含む
4　10YR3/2黒褐色 極細～極粗砂　φ0.3～3㎝の礫多量含む(土坑6)
5　10YR3/2黒褐色 小礫混じり 極細砂～シルト(整地層1)
6　10YR3/3暗褐色 極細砂～シルト　土師器片少量含む　φ0.2～1㎝の礫少量含む
7　10YR2/2黒褐色 極細砂～シルト　炭含む　→ 整地層2
8　10YR3/3暗褐色 細砂～シルト
9　10YR3/2黒褐色 極細砂～シルト　土師器片・炭少量含む　φ0.2～2㎝の礫少量含む
10　10YR3/3暗褐色 細砂　φ0.2～2㎝の礫少量含む　→ 整地層3

11　10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト　遺物多く含む　炭化物少量含む(土坑55)
12　10YR3/2黒褐色 極細砂～シルト　小礫含む
13　10YR3/3暗褐色 極細砂～シルト　中礫多量含む
14　10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト　粘性有り
15　10YR4/4褐色 極細砂混じりシルト　φ5㎝前後の礫含む
16　10YR5/4にぶい黄褐色 シルトに 10YR4/4褐色 シルトをブロック状に含む
17　10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じりシルト　粘性有り　→ 土坑26
18　10YR5/8黄褐色シルト　礫含む(基盤層)

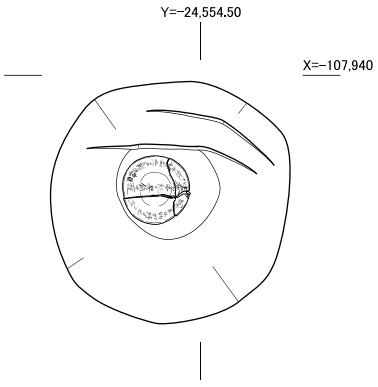
埋納遺構70

検出状況

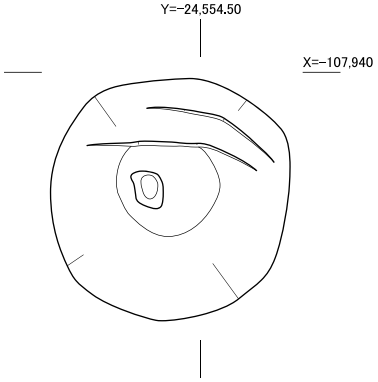


1　10YR3/2黒褐色 細砂～極細砂　締まり悪い
　φ3㎝前後の礫若干含む
2　10YR3/2黒褐色 細砂～極細砂　締まり悪い
　φ0.3㎜前後の石英粒含む

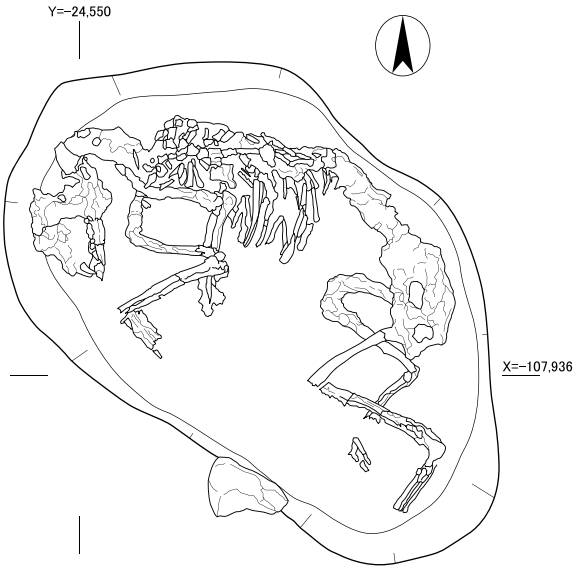
上皿・石英粒除去後

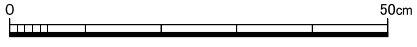


完掘状況

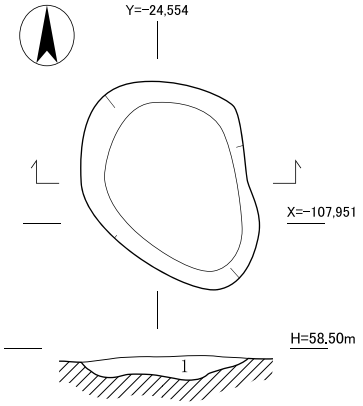


土坑101

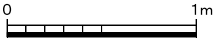




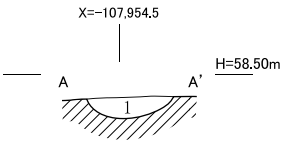
土坑12



1　10YR3/2黒褐色 礫混じり 細砂～シルト

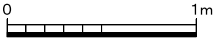


溝5



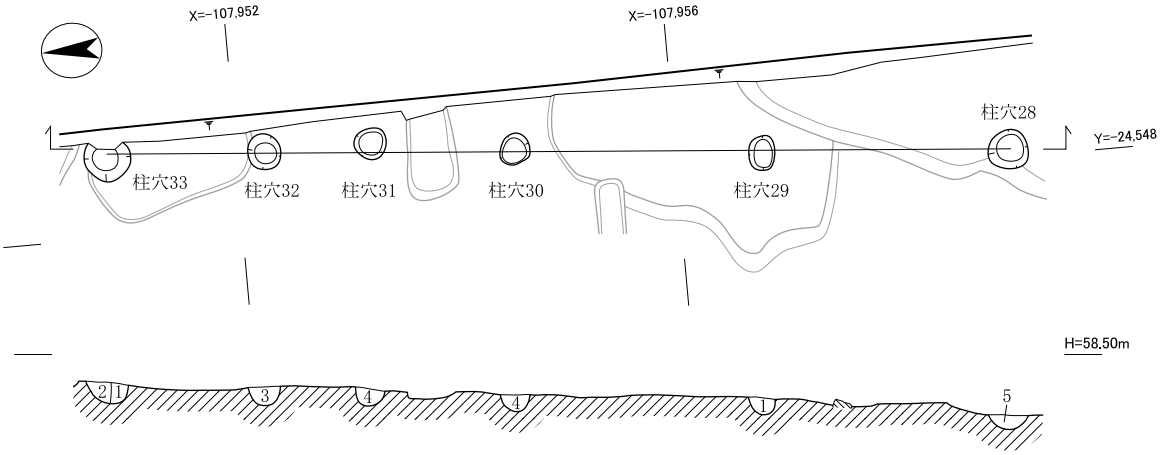
1　10YR3/3暗褐色 礫、瓦混じり 細砂～シルト

※ A-A'は図版1に対応する。



埋納遺構70・土坑101実測図（１：10）、土坑12実測図・溝５断面図（１：40）

柵1

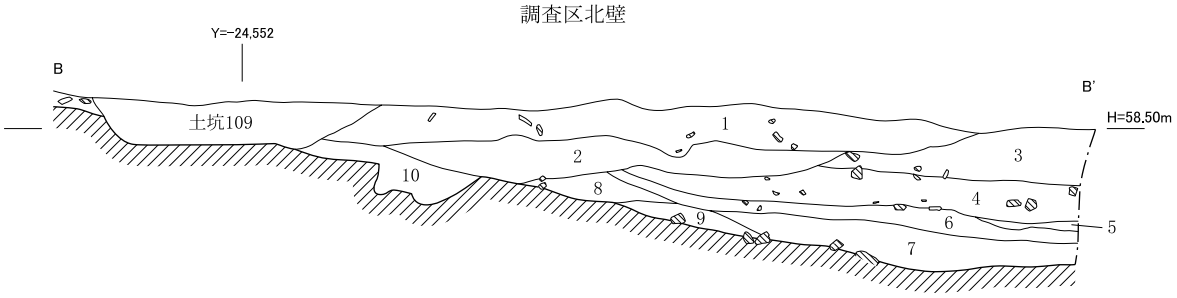


1 10YR2/2黒褐色 極細砂～シルト
2 10YR3/2黒褐色 礫混じり 中砂～シルト
3 10YR3/2黒褐色 中礫混じり 極細砂～シルト
4 10YR3/3暗褐色 極細砂～シルト
5 10YR3/3暗褐色 中礫混じり 極細砂～シルト

0 2m

谷110

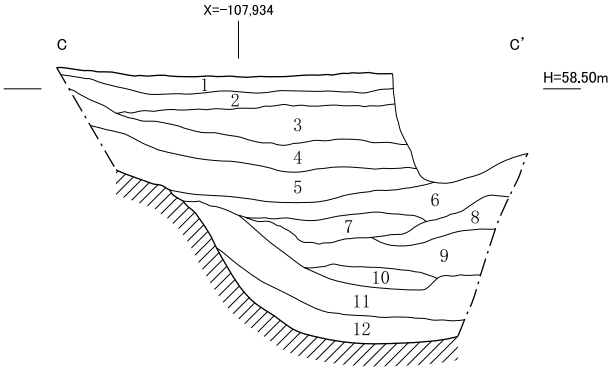
調査区北壁



1 10YR3/3暗褐色 極細砂～シルト φ3～5cm大の礫・土師器細片多量含む
2 10YR2/3黒褐色 極細砂混じりシルト 炭少量含む
3 10YR2/2黒褐色 極粗砂混じり 極細砂～シルト φ3～10cm大の礫・瓦多量含む ※鬼板出土層準
4 10YR2/1黒色 極細砂～シルト φ5cm大の礫少量含む
5 10YR3/2黒褐色 礫混じり 極粗砂～粗砂 φ5cm大の礫多量に含む
6 10YR1.7/1黒色 極細砂混じりシルト
7 10YR4/3にぶい黄褐色 粘土混じりシルト 締まり悪い
8 10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト
9 10YR4/6褐色 極粗砂混じり 極細砂～シルト 締まり悪い
10 10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト

0 2m

北東拡張区西壁

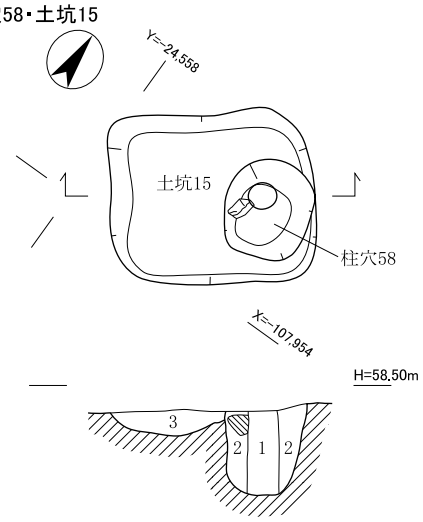


1 7.5YR5/6明褐色 極細砂～シルト
焼土、炭、焼瓦多量含む ※焼土層
2 10YR5/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト
3 10YR3/2黒褐色 極細砂～シルト φ2cmの礫含む
4 10YR2/3黒褐色 極細砂～シルト
5 10YR3/1黒褐色 極細砂～シルト
6 10YR1.7/1黒色 極細砂～シルト 炭含む
7 10YR2/2黒褐色 極細砂～シルト 炭含む
8 10YR3/3暗褐色 極細砂～シルト
9 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂～シルト
10 10YR3/3暗褐色 極細砂～シルト φ3cmの礫含む
11 10YR3/4暗褐色 極細砂～シルト
12 10YR4/3にぶい黄褐色 細礫～極細砂 φ3cmの礫含む

※ B-B'・C-C'は図版2に対応する。

柵1実測図（1：60）、谷110断面図（1：40）

柱穴58・土坑15

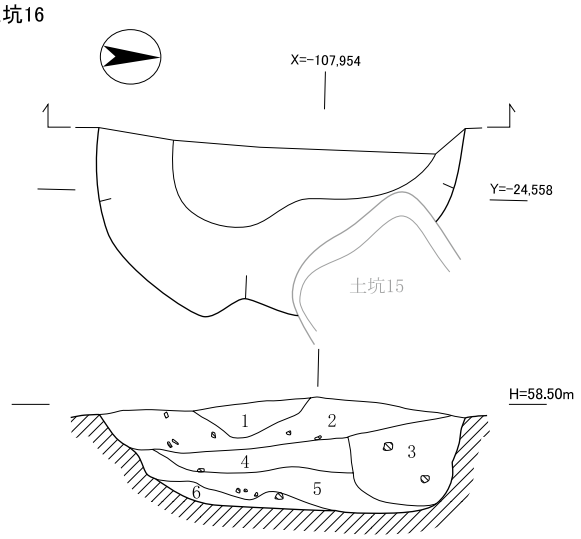


1　10YR3/2黒褐色 極細砂～シルト(柱穴58)
2　10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂～シルト(柱穴58)
3　10YR3/3暗褐色 小礫混じり 極細砂～シルト(土坑15)

0　2m

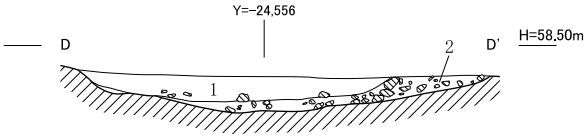
※ D-D'・E-E'は図版2に対応する。

土坑16



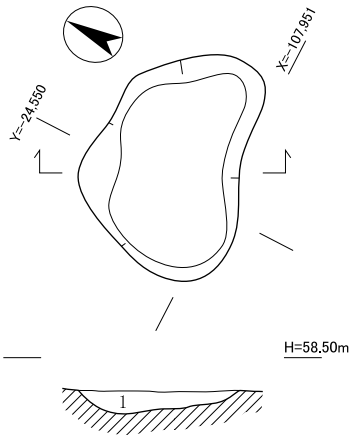
1　10YR4/2灰黄褐色 中砂混じり 極細砂～シルト(溝5埋土)
2　10YR3/3暗褐色 中礫混じり 極細砂～シルト
3　10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂～シルト 中礫若干含む
4　10YR4/2灰黄褐色 極細砂～シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルト混じり極細砂をブロック状に含む
5　10YR5/4にぶい黄褐色 シルト混じり極細砂に10YR4/3にぶい黄褐色極細砂～シルトをブロック状に含む
6　10YR5/6黄褐色 極細砂～シルト(周辺ベース層からの流れ込み)

土坑17



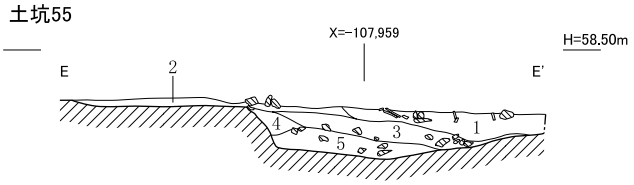
1　10YR4/4褐色 極細砂～シルト
2　10YR3/4暗褐色 小～中礫混じり 粗砂～シルト

土坑38



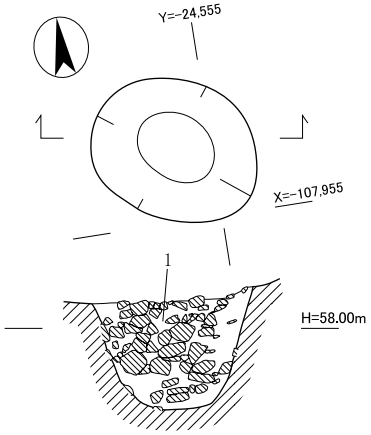
1　10YR3/4暗褐色 極細砂混じりシルト

土坑55



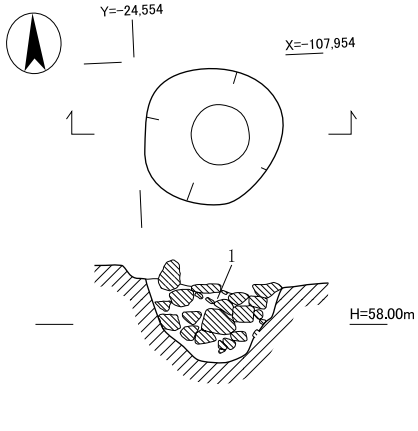
1　10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト 遺物多く含む 炭化物少量含む
2　10YR4/4褐色 小砂礫混じり 極細砂～シルト
3　10YR5/4にぶい黄褐色 極細砂～シルトに10YR3/3暗褐色極細砂～シルトをブロック状に含む
4　10YR4/6褐色 極細砂混じりシルト
5　10YR3/2黒褐色 中礫混じり 極細砂～シルト

土坑54



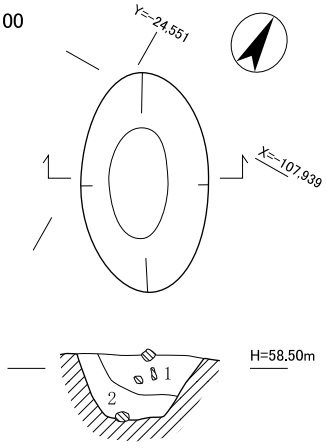
1　10YR3/3暗褐色 粗砂混じり 極細砂～シルト 拳大の礫多量含む

土坑60



1　10YR3/2黒褐色 粗砂混じり 極細砂～シルト 拳大の礫多量含む

土坑100

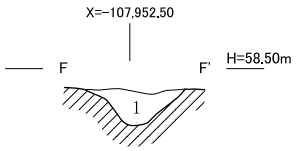


1　10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト φ3～5cm大の礫含む
2　10YR3/4暗褐色 極細砂混じりシルト φ3～5cm大の礫含む

柱穴58、土坑15・16・38・54・60・100実測図、土坑17・55断面図（1：40）

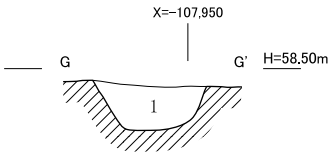
図版8　遺構

溝19



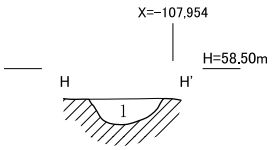
1　10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂～シルト

溝20



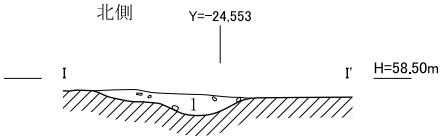
1　10YR3/4暗褐色 礫混じり 極細砂～シルト

溝45

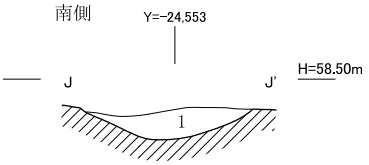


1　10YR3/3暗褐色 礫混じり 極細砂～シルト

溝50

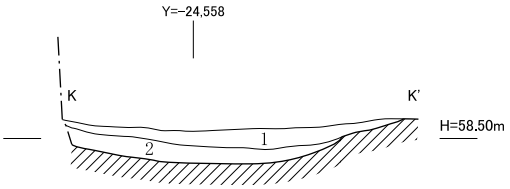


1　10YR4/3にぶい黄褐色 礫混じり 極細砂～シルト



1　10YR3/3暗褐色 粗砂小礫混じり 極細砂～シルト

溝80

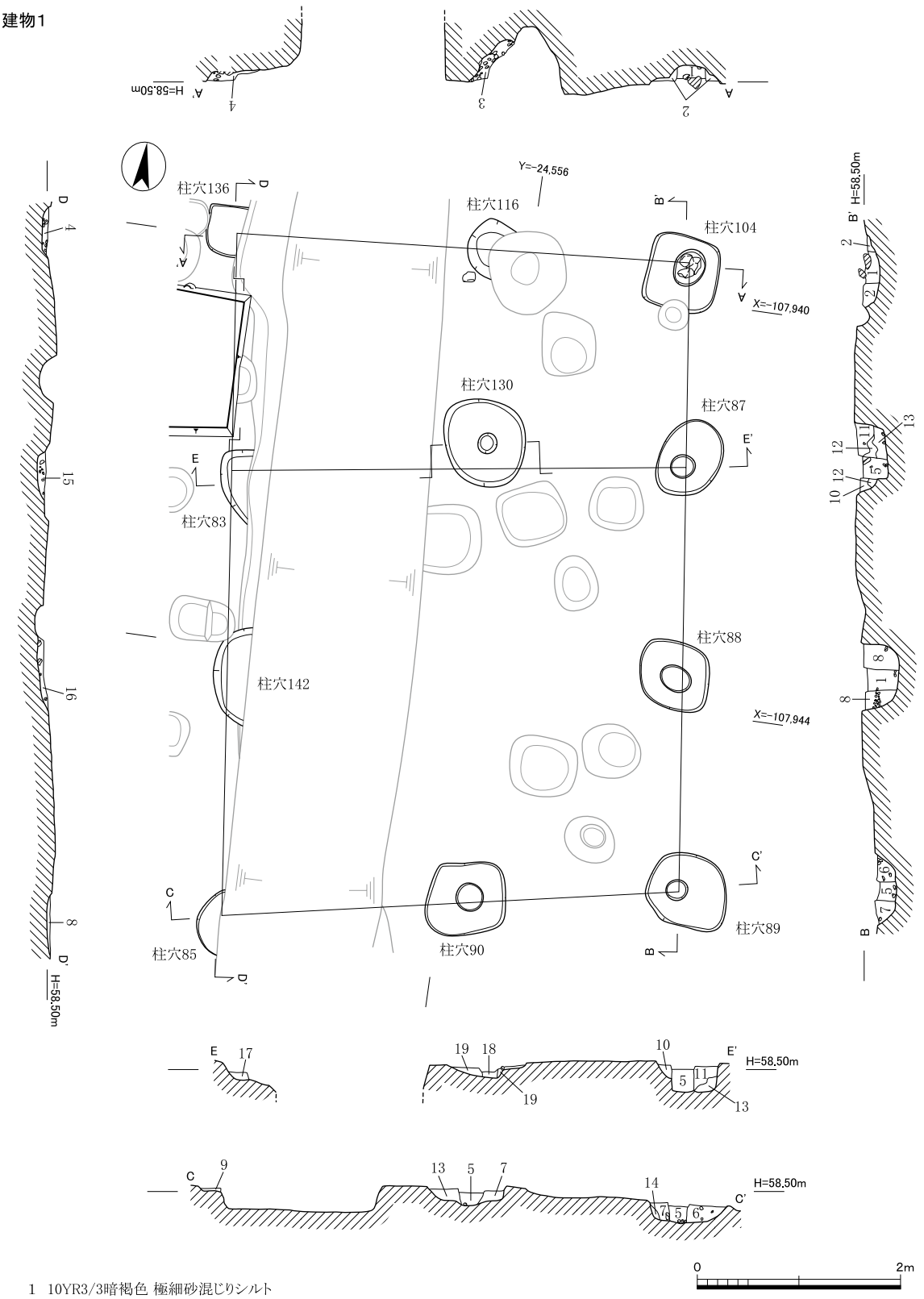


1　10YR2/2黒褐色 極細砂混じりシルト
　φ3㎝前後の礫若干含む
2　10YR2/3黒褐色 細砂混じり 極細砂～シルト
　φ3㎝大の礫含む

※ F-F'～K-K'は図版2に対応する。

溝19・20・45・50・80断面図（1：40）

建物1

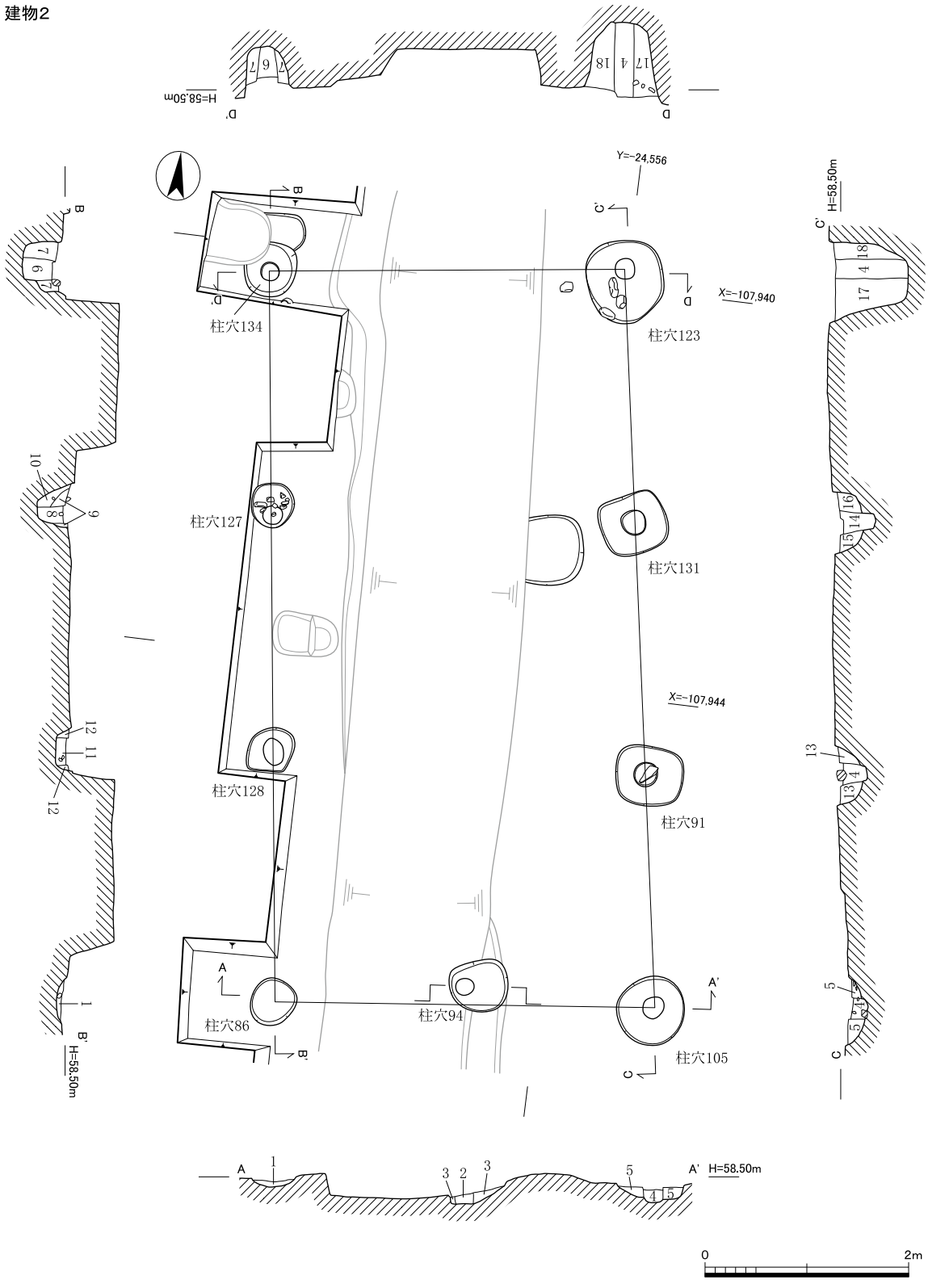


0　2m

1　10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト
2　10YR4/4褐色 極細砂混じりシルト
3　10YR3/3暗褐色 極細砂～シルト　φ3cm前後の礫多量含む
4　10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト　φ3cm前後の礫多量含む
5　10YR3/2黒褐色 極細砂～シルト
6　10YR3/4暗褐色 極細砂混じりシルト　φ3cm大の礫含む
7　10YR3/3暗褐色 極細砂～シルト
8　10YR3/4暗褐色 シルト混じり極細砂　φ2cm前後の礫含む
9　10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト
10　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト混じり極細砂
11　10YR2/3黒褐色 極細砂混じりシルト　φ2cm前後の礫少量含む
12　10YR3/4暗褐色 極細砂～シルト
13　10YR4/4褐色 極細砂～シルト
14　10YR4/4褐色 シルト混じり極細砂
15　10YR2/3黒褐色 極細砂シルト　φ2cm前後の礫含む
16　10YR4/2灰黄褐色 極細砂～シルトに10YR3/2黒褐色
極細砂～シルトをブロック状に含む
17　10YR2/3黒褐色 極細砂～シルト　φ2cm前後の礫含む
18　10YR3/4暗褐色 極細砂混じりシルト
19　10YR3/3暗褐色 極細砂～シルト　φ2cm前後の礫多量含む

建物1実測図（1：60）

建物2

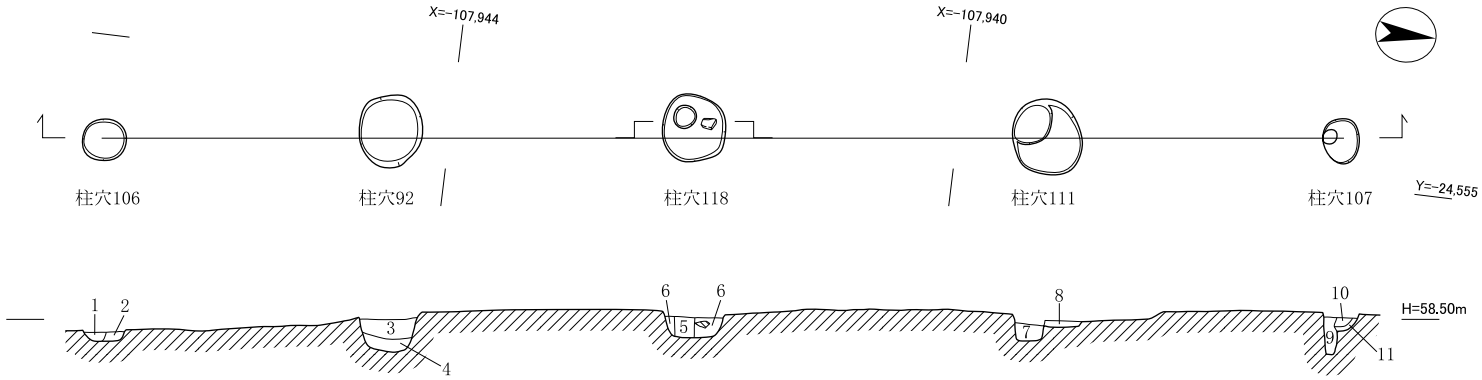


1　10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト
2　10YR3/3暗褐色 小礫混じり 極細砂～シルト
3　10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト　φ5cm前後の礫含む
4　10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト
5　10YR3/4暗褐色 極細砂混じりシルト　φ5cm前後の礫少量含む
6　10YR4/2灰黄褐色 極細砂～シルト
7　10YR3/2黒褐色 シルト混じり極細砂　φ3cm前後の礫含む
8　10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂～シルト
9　10YR4/4褐色 極細砂混じりシルト　φ5cm大の礫含む
10　10YR4/2灰黄褐色 極細砂混じり　極細砂～シルト
11　10YR3/3暗褐色 極細砂～シルト
12　10YR3/4暗褐色 極細砂～シルト
13　10YR4/4褐色 シルト混じり極細砂
14　10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト
15　10YR4/4褐色 シルト混じり極細砂　φ5cm前後の礫含む
16　10YR3/4暗褐色 シルト混じり極細砂
17　10YR3/2黒褐色 細礫混じり 極細砂～シルト
18　10YR3/3暗褐色 細礫混じり 極細砂～シルト　φ3cm前後の礫含む

建物２実測図（１：60）

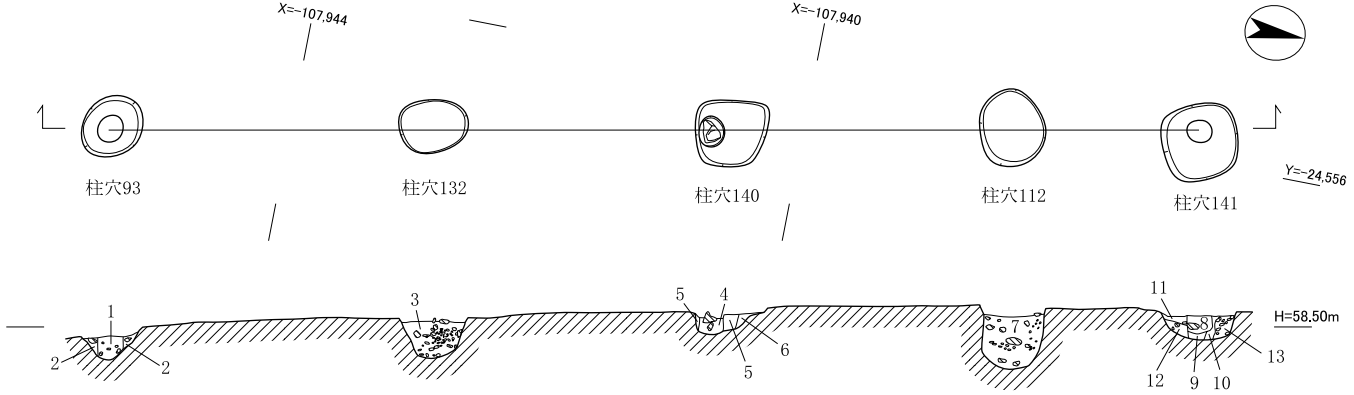
柵２・３実測図（１：60）

柵2



1　10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト
2　10YR3/3暗褐色 極細砂～シルト
3　10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト
4　10YR3/2黒褐色 極細砂混じりシルト
5　10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト　φ5～10cmの礫含む
6　10YR3/4暗褐色 極細砂混じりシルト
7　10YR3/4暗褐色 極細砂～シルト　φ5cm前後の礫含む
8　10YR4/4褐色 シルト混じり極細砂
9　10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト
10　10YR4/4暗褐色 シルト混じり極細砂　φ3cm大の礫含む
11　10YR5/6黄褐色 シルト混じり極細砂

柵3



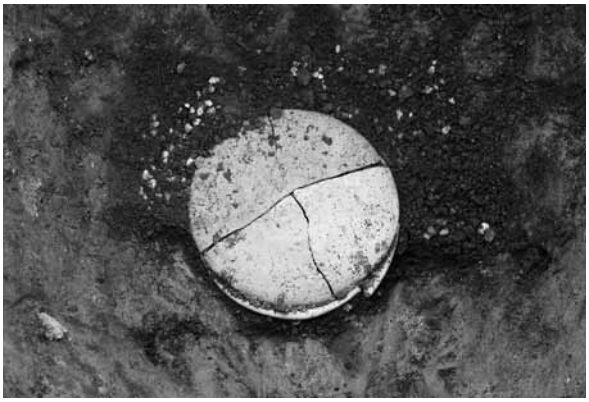
1　10YR5/3にぶい黄褐色 極細砂～シルト
　φ3cm大の礫含む
2　10YR5/4にぶい黄褐色 極細砂～シルト
　φ5cm大の礫含む
3　10YR4/4にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト
　φ3～5cm大の礫多量含む
4　10YR3/3暗褐色 極細砂混じりシルト
5　10YR5/4にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト
6　10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂混じりシルト
7　10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂混じり極細砂～シルト
　φ3～10cm大の礫多量含む
8　10YR3/3暗褐色 極細砂～シルト
9　10YR4/6褐色 シルト～極細砂
10　10YR3/4暗褐色 シルト～極細砂
11　10YR4/4褐色 シルト～極細砂
12　10YR5/6黄褐色 シルト～極細砂
13　10YR2/2黒褐色 極細砂～シルト
　φ2cm前後の礫多量含む

図版11　遺構

1　調査区南半　第１面全景（北から）

2　調査区北半　第１面全景（北から）

1　埋納遺構70 土器検出状況（南から）

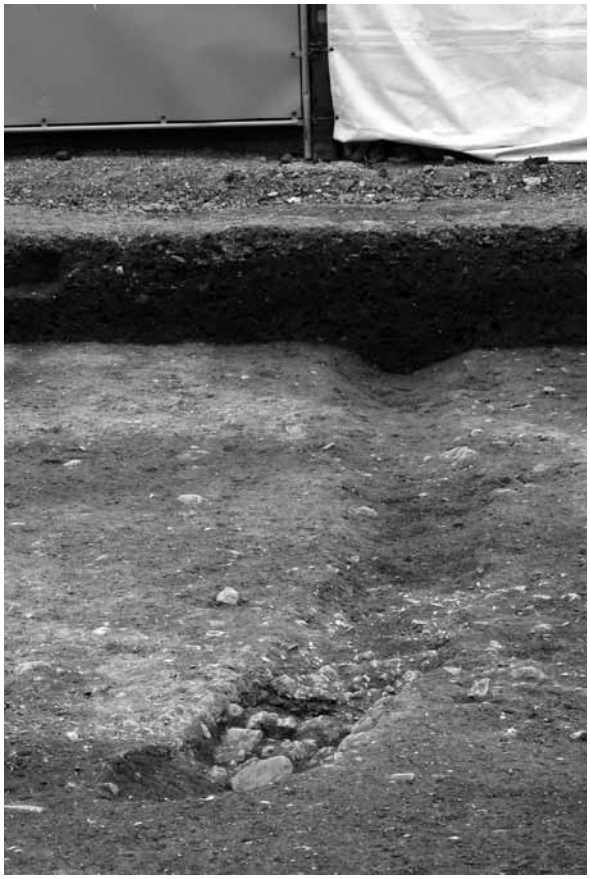


2　埋納遺構70 土器検出状況　拡大（南から）

3　埋納遺構70 土器埋納状況（南から）

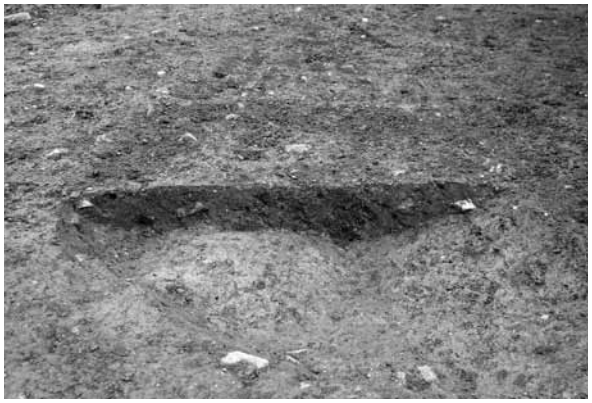
4　埋納遺構70 上蓋除去状況　拡大（南から）

5　埋納遺構70 石英粒除去後（南から）



1　溝５（東から）

2　溝５断面（東から）



3　土坑12断面（北から）

4　土坑101 イヌ検出状況（南東から）

1　調査区南半　第２面全景（北から）

2　調査区北半　第２面全景（北から）

1　建物１・２（北から）

2　建物１ 柱穴90断面（南から）

3　建物１ 柱穴104断面（北から）

4　建物２ 柱穴91断面（東から）

5　建物２ 柱穴131断面（東から）

1　柵１（南西から）

2　柵１ 柱穴29断面（西から）

3　柵１ 柱穴32断面（西から）

4　土坑60〔左〕・土坑54〔右〕完掘状況（北から）

5　土坑60断面（南から）

6　土坑54断面（南から）

1　谷110断面（西から）

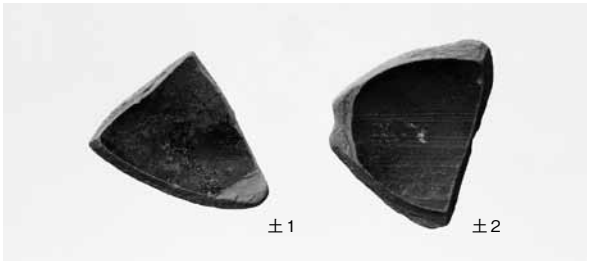
2　谷110北東拡張区断面（東から）

7

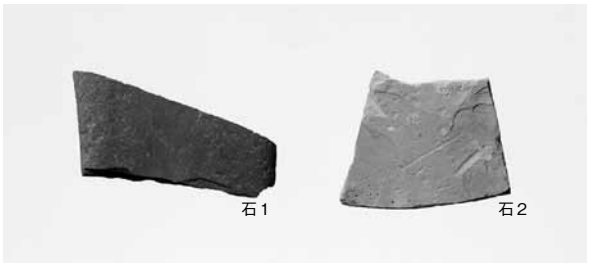
32

1

2


土1 土2

金1 金2 金3


石1 石2

金4 金5

土3

石3

土器類・土製品・石製品・金属製品

瓦1

瓦2

瓦3

瓦4

瓦5

瓦6

瓦7

瓦8

瓦9

瓦11

瓦12

瓦13

瓦14

瓦10

瓦15

軒瓦

瓦16

瓦17

瓦18

瓦19

瓦20

瓦21

瓦22

瓦23

道具瓦・平瓦

報　告　書　抄　録

ふりがな	きたのはいじ・きたのいせき
書名	北野廃寺・北野遺跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２３－６
編著者名	三好孝一
編集機関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2024年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
北野廃寺（きたのはいじ） 北野遺跡（きたのいせき）	京都市北区（きょうとしきたく） 北野下白梅町（きたのしもはくばいちょう） 30	26100	161 160	35度 01分 36秒	135度 43分 51秒	2023年５月 29日～2023 年７月31日	297㎡	住戸建設 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北野廃寺 北野遺跡	寺院跡 集落跡	飛鳥・奈良時代		軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦	既往の調査で検出されていた谷地形の延長部を検出し、大量の遺物が出土した。その中には、瓦類のほか、三彩の小型壷などが含まれていた。 土師器皿を納めた地鎮遺構は、江戸時代後期における神道修法の具体的事例となった。
		平安時代前・中期	掘立柱建物、柵、柱穴、土坑、溝、谷	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、三彩陶器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦、土製品、金属滓	
		平安時代後期	土坑	輸入陶磁器、石製品	
		室町時代後期以前	柵、土坑、溝	土師器	
		室町時代後期～安土桃山時代	土坑、溝	動物遺存体	
		江戸時代後期	土坑、埋納遺構	土師器(地鎮具)、石製品	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2023-6

北野廃寺・北野遺跡

発行日　2024年3月31日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番
〒602-8358　TEL 075-467-5151